

# 田部家本屋敷跡

2025年3月

雲南市教育委員会



# 序

田部家本屋敷は、松江藩屈指のたたら経営者であった田部家の邸宅でした。嘉永2年（1849）の記録には「三拾九間口入三十五間 田部長右衛門」とあり、千坪を優に超えるものであったことがわかります。邸内には、藩主や藩役人による巡郷の際、宿泊などに供した広い「座敷」をはじめ、「御主人居間」・「算用場」・「文庫」・「製鉄庫」などの施設が建ち並んでいました。しかしながら、本屋敷は慶応元年（1865）の火災により失われ、その後、再建されることはありませんでした。

雲南市教育委員会は、たたら製鉄で繁栄した田部家の姿が窺える本屋敷跡の保存状態を確認するため、発掘調査を行いました。調査の結果、その中心部においては建物跡を確認できませんでしたが、敷地の造成過程を示す石垣や大鍛冶場があったことが明らかとなるなど、新たな知見が得られました。今回の調査成果が本市を特徴づけるたたら文化の調査研究や活用の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力を賜りました田部長右衛門様をはじめ、関係者の方々に厚く感謝申し上げます。

令和7年3月

雲南市教育委員会

教育長 小田川 徹哉



# 例 言

1. 本書は、雲南市教育委員会が令和6年度国庫補助事業雲南市内遺跡発掘調査として実施した田部家本屋敷跡の確認調査報告書である。
2. 調査地は次のとおりである。  
田部家本屋敷跡 島根県雲南市吉田町吉田 2557-2
3. 調査組織は次のとおりである。  
事務局 小田川徹哉（教育長）、中村和磨（教育部長）、金森里志（教育次長）、志賀 崇（文化財課主幹）  
調査担当 角田徳幸（文化財課長）、高橋誠二（主幹：5月末まで）、松谷恵美子（会計年度任用職員）
4. 発掘調査及び報告書作成に当たっては、次の方々、関係機関よりご指導・ご協力を賜った。  
井上量夫（田部家支配人）、岩田基宏（株式会社 JUTOKU 常務取締役）、倉内 勝、西尾克己、鳥谷智文（松江工業高等専門学校教授）、岩崎孝平（島根県教育庁文化財課主任）、阿部賢治（島根県埋蔵文化財調査センター調査員）、吉松優希（島根県古代文化センター主任研究員）  
島根県埋蔵文化財調査センター、株式会社トーワエンジニアリング
5. 発掘作業は、雲南市シルバー人材センターに委託した。
6. 炭化物の年代測定は、文化財調査コンサルタント株式会社に委託した。
7. 挿図中の北は、測量法に基づく平面直角第Ⅲ系のX軸方向を差し、座標系のXY座標は世界測地系による。レベル高は海拔高を示す。
8. 本書に掲載した実測図は角田が作成し、松谷が浄書した。
9. 本書に掲載した写真のうち、写真図版1 田部家本屋敷絵図面、写真図版3 第1・2 トレンチ空中写真については田部家より提供を受けた。
10. 写真図版3以外の遺構は角田、遺物は島根県古代文化センター吉松主任研究員が撮影した。
11. 本書の執筆と編集は、角田が行った。
12. 本書掲載の図面・写真等は、雲南市歴史資料収蔵センターで保管している。

# 本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査の経過 .....	2
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境 .....	3
第2節 歴史的環境 .....	3
第3章 調査の成果	
第1節 調査の概要 .....	7
第2節 第1トレンチ・第2トレンチ	
(1) 北壁土層 .....	10
(2) 第1トレンチ東壁土層 .....	10
(3) 第2トレンチ東壁土層 .....	11
(4) 石垣 .....	11
(5) 出土遺物 .....	18
第3節 第3トレンチ .....	21
第4節 第4トレンチ .....	22
第5節 第5トレンチ .....	24
第4章 まとめ .....	26

# 挿 図 目 次

第 1 図	田部家土蔵群	1
第 2 図	雲南市吉田町周辺の地形	3
第 3 図	田部家本屋敷跡の位置と周辺の製鉄遺跡・鋳・大鍛冶場	5
第 4 図	田部家本屋敷見取り図	8
第 5 図	田部家本屋敷跡調査区配置図	9
第 6 図	第 2 トレンチで出土した鍛冶滓	11
第 7 図	第 1・2 トレンチ実測図 (1)	12
第 8 図	第 1・2 トレンチ実測図 (2)	13
第 9 図	第 1 トレンチ実測図	14
第 10 図	第 2 トレンチ実測図 (1)	15
第 11 図	第 2 トレンチ実測図 (2)	16
第 12 図	炭化物の暦年較正結果	17
第 13 図	第 1・2 トレンチ出土遺物実測図 (1)	19
第 14 図	第 1・2 トレンチ出土遺物実測図 (2)	20
第 15 図	第 3 トレンチ実測図	21
第 16 図	第 4 トレンチ実測図	22
第 17 図	第 4 トレンチ出土熨斗棟石実測図	23
第 18 図	第 5 トレンチ実測図	24
第 19 図	田部家本屋敷と町鍛冶屋の位置	28

# 挿 表 目 次

第 1 表	第 1・2 トレンチ採集炭化物の年代測定結果	17
-------	------------------------	----

# 写真図版目次

- 図版 1 田部家本屋敷絵図面
- 図版 2 田部家本屋敷調査地点近景（南西から）  
田部家本屋敷調査地点近景（東から）
- 図版 3 第1・2トレンチ（南東上空から）  
第2トレンチ（上空から）
- 図版 4 第1トレンチ（南西から）  
第1トレンチ古石垣と北壁土層（南から）
- 図版 5 第1トレンチ新石垣と北壁土層（南から）  
第1トレンチ東壁土層（西から）
- 図版 6 第1トレンチ古石垣（南から）  
第1トレンチ新石垣（南から）
- 図版 7 第1トレンチ（西から）  
第1トレンチ（東から）  
第1トレンチ新石垣屈曲部（東から）
- 図版 8 第1トレンチ古石垣中の鍛冶滓  
（南東から）  
第1トレンチ古石垣中の鍛冶滓（南から）
- 図版 9 第1・2トレンチ（南西から）  
第1・2トレンチ（西から）
- 図版10 第2トレンチ（南から）  
第2トレンチ北壁土層（南から）
- 図版11 第2トレンチ東壁土層（西から）  
第2トレンチ東壁古石垣・新石垣間土層  
（西から）
- 図版12 第2トレンチ東壁新石垣南側土層  
（西から）  
第2トレンチ新旧石垣（南西から）
- 図版13 第2トレンチ新石垣中の鍛冶滓  
（東南から）  
第2トレンチ新石垣中の鍛冶滓（南から）  
第2トレンチ新石垣前の椀形鍛冶滓  
（南から）
- 図版14 第3トレンチ（北から）  
第3トレンチ西壁土層、焼土（東から）
- 図版15 第4トレンチ（南から）  
第4トレンチ東壁土層（西から）
- 図版16 第5トレンチ（東から）  
第5トレンチ北壁土層（南東から）
- 図版17 第5トレンチ石列（南から）  
第5トレンチ北壁土層（南から）
- 図版18 第1・2トレンチ出土陶磁器（1）
- 図版19 第1・2トレンチ出土陶磁器（2）
- 図版20 第1トレンチ出土陶磁器
- 図版21 第1・2・4トレンチ出土遺物



# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

松江藩屈指のたたら経営者であった田部家は、雲南市吉田町吉田を本拠とする。吉田の本町通り沿いには、総数20棟を数える白壁の土蔵群が建ち並ぶ。文政蔵・嘉永蔵・正平蔵・明治蔵など元号で名づけられた蔵や、帳蔵・米蔵・畳蔵など用途を示した蔵があり、たたら製鉄で栄えた往時の様子を窺うことができる。

田部家本屋敷は、土蔵群の南側、本町通りを挟んだところにあった。同家に伝わる絵図面によれば、松江藩主らを饗応する座敷や御成門をはじめ、当主居間・算用場・文庫・製鉄庫などがあり、松江藩のたたら経営者を代表する鉄師頭取をつとめた家格にふさわしい屋敷といえる。しかし、本屋敷は慶応元年（1865）の火災で焼失し、その後、同じ場所に再建されることはなかった。

雲南市は、重要有形民俗文化財菅谷たたら山内や、田部家土蔵群に代表されるたたらの文化を発信することで、交流人口の拡大など地域振興に役立てるべく平成30年度に雲南市たたらプロジェクト会議を官民協働で組織して、取り組みを進めている。この事業の一つとして、たたら文化伝道師検定制度がつくられ、検定マニュアル『雲南のたたら文化』を刊行した。同書は、たたら製鉄の歴史や菅谷たたら山内のみならず、田部家や吉田のまちなみについても紙数を割いている。田部家本屋敷につ



第1図 田部家土蔵群

いては、絵図面の写真や、注記を翻刻した図を用いて解説されており、その概要を知ることができるようになった（鳥谷 2022）。

田部家本屋敷は、たたら製鉄の富を背景に建造されたものであり、その繁栄の証といえる。市教育委員会では、本屋敷跡の様相を明らかにすることができれば、たたら文化の発信に貢献できると考え発掘調査を計画した。敷地は駐車場などとして利用されているため調整が必要ではあったが、所有者である田部家のご理解・ご協力を得て、調査を実施する運びとなった。

## 第2節 調査の経過

発掘調査は、令和6年5月8日から6月13日まで実施した。調査箇所は第1～5トレンチの5か所で、調査面積は73㎡である。

本屋敷跡地には、かつて製材所や給油所、車庫などの施設があったという。現在、これらは撤去されているが、敷地の一部にコンクリート基礎が残る。調査トレンチは、駐車場として利用されている北半部と、コンクリート基礎部分を避ける位置に設定した。

第1～3トレンチは、本屋敷の中心部が考えられるところである。遺構が残存していれば表土から浅いところにあるとみて、当初は人力で掘り下げた。第2トレンチでは石列が検出できたが深さがあったことから、全体像を把握するために第1・2トレンチの周囲を重機掘削で拡張した。その結果、石列は石垣であり、新旧2段階にわたることが判明した。石垣は、南の吉田川に向かう緩斜面に段状に築かれており、本屋敷の建物跡ではなく屋敷地の造成に関わる遺構であることが明らかになった。造成土からは椀形鍛冶滓が多量に出土し、調査区付近で大鍛冶操業が行われた可能性が考えられたため、文化財調査コンサルタントに炭化物の年代測定を依頼して、5月31日に試料採取を行っている。第3トレンチでは、火災によるとみられる焼土面が検出されたが、建物跡などの遺構は確認できなかった。

第3トレンチの焼土面は、慶応元年（1865）の火災で生じたことが考えられる。敷地の周辺部には本屋敷跡の遺構が残る可能性も想定されたため、第4・5トレンチを設定した。第4トレンチは、調査前から表土に石列が露出していたが、原位置を保つものではなかった。本屋敷があったとみられる整地面はさらに下層にあり、火災による焼土面を確認した。現存する土蔵の北側に設けた第5トレンチでは、建物の基礎となる切石列を検出することができた。第4トレンチの整地面と同じ高さにあり、本屋敷を構成する建物であったとみられる。

調査区の全容がほぼ明らかになった6月1日には、現地説明会を実施した。周知期間が短かったのにもかかわらず市内外から60余名の参加者があり、田部家本屋敷跡への関心の高さが窺えた。

調査は、現地の写真撮影、実測図作成を終えた後、6月13日に第1～3トレンチは重機を用い、第4・5トレンチは人力によって埋め戻しを行い終了した。

## 第2章 遺跡の位置と環境

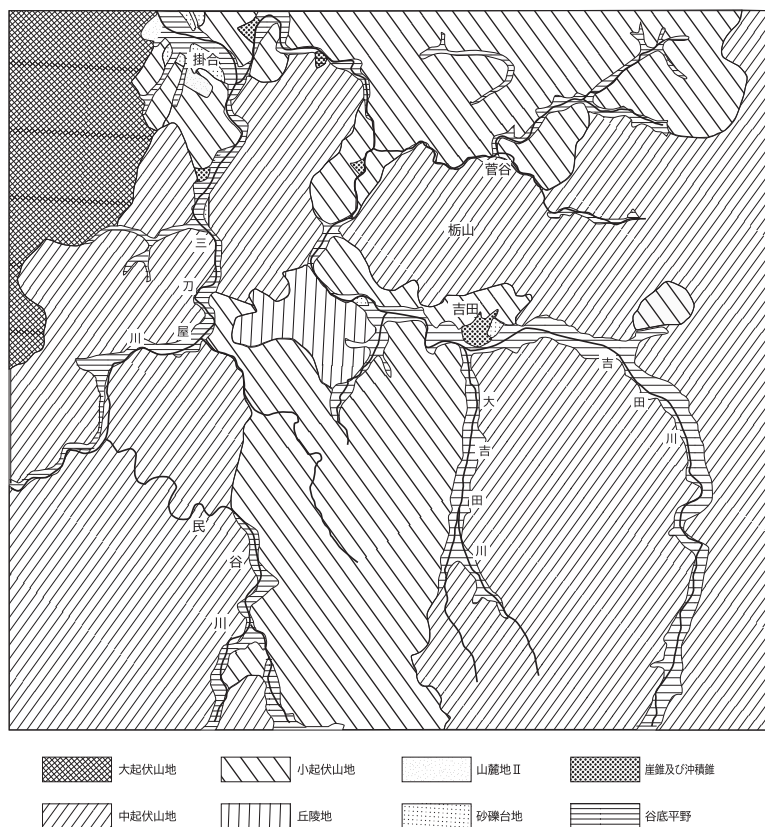
### 第1節 地理的環境

田部家本屋敷跡は、島根県雲南市吉田町吉田 2557-2 番地に所在する。

中国山地に抱かれる雲南市吉田町は、東は仁多郡奥出雲町、西に飯石郡飯南町、南は広島県庄原市高野町と境を接する。明治22年(1889)の町村制施行時には飯石郡吉田村と田井村、昭和29年(1954)に両村が合併して飯石郡吉田村、平成16年(2004)に雲南市制施行に伴い雲南市吉田町となり現在に至っている。吉田町吉田は、その中心地である。

大万木山(標高1,218m)に源を発する吉田川は、三刀屋川へと流れ下る。吉田町吉田は、その北岸、大吉田川が合流する地点に所在する。町場は、吉田川から北の栃山に向かってなだらかに傾斜する斜面に形成されており、周囲に細長く形成されている谷底平野よりはやや高い。これは、栃山山麓に形成された崖錐及び沖積錐と砂礫台地の上に位置しているためである。田部家本屋敷跡の基盤層は、この崖錐とみられ、屋敷地が形成される以前は南東に向かって緩く傾斜する地形であったと考えられる。

周囲に広がる山地は、栃山と大万木山から延びる山塊が起伏量200～400mの中起伏山地、大吉田川左岸が起伏量200m以下の小起伏山地である。表層地質は、栃山の西側から大吉田川の左岸に斑れい岩質岩石がみられ、その周囲には花崗岩質岩石が広がる(島根県1978・1982)。



第2図 雲南市吉田町周辺の地形

### 第2節 歴史的環境

田部家本屋敷跡が所在する雲南市吉田町を中心とする地域では、古代以来、鉄の生産が行われてきた。近世たたら製鉄の繁栄は、その到達点であり、当地域の“鉄”の歴史を概観する。

古代出雲の鉄文化は、中国大陸や朝鮮半島より持ち込まれた鉄器の使用から始まった。弥生時代中期末の奥出雲町国竹遺跡では、朝鮮半島で作られた板状鉄斧が出土している（田中・石田 2000）。弥生時代後期末になると、簡単な鉄器づくりが始まる。薄い鉄板を炉であぶって軟らかくした後、鑿を使って製品の形に切り、刃先を砥石で研いで仕上げるもので、鞆はまだなく“原始鍛冶”とも呼ばれる初歩的な製作技術である。雲南市木次町平田遺跡では、竪穴建物から鉄板を切った際に生じる鉄片をはじめ、製作途中の鉄器が出土した。鉄器は、鑿切りによる鉄板の成形だけでできる鍔など小さく簡単なものに限られる。鉄素材は、鑿で切って鉄器を作るのに適した軟鋼で、鉄鉱石を原料とし朝鮮半島で作られた（木次町教委 2000）。

鉄を様々な用途に応じた鉄器に加工するには、鞆が必要である。出雲市古志本郷遺跡で出土した鞆の羽口は古墳時代前期のもので、日本最古とされる羽口に類似する（角田 2023）。古墳時代中期の雲南市三刀屋町六重城南 1 号墳では、鉄斧・鎌・鉈・錐などのほか、鉄鐸・鑷子状鉄製品が出土した（島根県教委 2009a）。鉄鐸と鑷子状鉄製品は、ともに朝鮮半島に起源をもち、鉄鐸は鍛冶工人が使った祭祀具との見方がある。被葬者は朝鮮半島の鉄素材を用いて鉄器を作る工人の可能性もある。

日本列島では、鉄器が使われるようになってからも長らく、製品やその素材となる鉄を朝鮮半島に頼る時代が続いたが、古墳時代後期には鉄生産が開始される。雲南市掛合町羽森第 3 遺跡は、6 世紀末頃の製鉄炉であり、出雲でもさほど遅れることなく製鉄が行われたことが窺える（掛合町教委 1998）。天平 5 年（733）に編纂された『出雲国風土記』は、飯石郡の波多小川（雲南市掛合町の波多川）、飯石小川（三刀屋町の多久和川）に製鉄原料の砂鉄があること、仁多郡では各郷で鉄と鉄器の生産が行われていたことを伝える。『風土記』が記す奈良時代の製鉄遺跡には、雲南市三刀屋町瀧坂遺跡がある。製鉄炉は確認されていないが、炉壁をはじめ製錬滓が多量に出土した。近くの鉄穴内遺跡は、製鉄炉でできた鉄の成分調整を行って鉄素材としたほか、鋤や鎌なども製作した（島根県教委 2009a）。また、仁多郡では仁多郡家の北側に位置する奥出雲町芝原遺跡で鍛冶工房が明らかになっており（仁多町教委 1994）、雲南市木次町寺田 I 遺跡でも鉄鍔・鑿などの鍛冶用具のほか、鉄素材である切鉄が出土している（木次町教委 2007）。

中世になると、製鉄炉や地下構造の大規模化や整備が進められた。平安時代（12 世紀）の雲南市吉田町大志戸 II 遺跡 2 号炉は、炉壁による復元などから長 250 ～ 260cm ・ 幅 40 ～ 50cm ・ 高さ 80cm と報告されており（島根県教委 2009b）、長さ 2m を超える大形炉であったことがわかる。炉の大形化に伴い、保温防湿施設である地下構造も大規模になる。地下構造の形態は、地域によって多様な展開をみせるが、出雲では製鉄炉の直下に設ける本床状遺構だけを有するものがほとんどである。平安時代（12 世紀）の雲南市木次町家ノ前遺跡は、長さ 5.5m ・ 幅 1m ほどの細長い本床状遺構をもち、内部には粉炭を敷いた（木次町教委 2003）。室町時代から江戸時代初め（16 ～ 17 世紀初）の雲南市吉田町大志戸 II 遺跡 3 号炉は、本床状遺構が長 4.7m ・ 幅 2.1m ・ 深 1.4m と幅が広く深い（島根県教委 2009b）。これは、本床状遺構の乾燥作業をするために、内部に薪材を詰め、粘土の天井を架け、焼き抜いたからである。乾燥後には、天井を落として、その上にさらに粉炭を敷き詰める入念な防湿構造をもつ。木炭窯と同じ構築法で、近世たたらの本床・小舟とも共通する地下構造の構築法である。



1. 平田遺跡 2. 九重城南遺跡 3. 羽森第1～3遺跡 4. 瀧坂遺跡 5. 鉄穴内遺跡 6. 寺田Ⅰ遺跡 7. 槇ヶ坪遺跡 8. 大志戸Ⅱ鉦跡
9. 家ノ前鉦跡 10. 家の上遺跡 11. 粟目Ⅰ遺跡 12. 春日迫鉦跡 13. 狼原遺跡 14. 枯木ヶ谷鉦跡 15. 上垣内鉦跡
16. 堂々ノ内Ⅰ・Ⅱ鉦跡 17. 菅谷鉦 18. 杉戸鉦 19. 中谷鉦 20. 八重滝鉦 21. 町鍛冶屋 22. 恩谷鍛冶屋 23. 滝谷鍛冶屋
24. 郷城鉦 25. 井原谷鉦 26. 川上鉦 27. 中谷鉦 28. 芦谷鍛冶屋 29. 杉谷鍛冶屋 30. 内谷鍛冶屋 31. 大吉鉦 32. 横原鉦
33. 志谷鉦跡 34. 杉谷鉦跡 35. 泉原鉦跡

第3図 田部家本屋敷跡の位置と周辺の製鉄遺跡・鉦・大鍛冶場

平安時代後半から室町時代の製鉄遺跡は、これらのほか雲南市内では多数発掘されており、掛合町羽森第1・2遺跡、吉田町粟目Ⅰ遺跡・春日迫遺跡・狼原遺跡、木次町枯木ヶ谷遺跡・上垣内遺跡、三刀屋町堂々ノ内Ⅰ・Ⅱ遺跡、大東町段B遺跡などの調査例がある。また、現在進めている製鉄遺跡の年代測定でも、その大半は鎌倉から室町時代との結果が得られている（倉内・角田・松尾2025）。製鉄遺跡の増加は、炉と地下構造の大形化・整備と相俟って、中世製鉄の盛行ぶりを窺わせる。

近世たたら製鉄は、中国山地一帯で行われたが、とりわけ雲南市吉田町を中心とした地域は鉄師田部家が拠点としたことで知られる。同家は、享保11年（1726）に松江藩が発布した「鉄方法式」で操業を認められた鉄師で、藩と鉄師の調整に携わった鉄師頭取をつとめた。幕末から明治初期にかけて田部家は、鉦5ヶ所と鍛冶屋8ヶ所を経営する。明治5年（1872）には、菅谷鉦のほかに、杉戸鉦・松笠村中谷鉦・入間村八重滝鉦・志津見村弓谷鉦を操業し、雲南市吉田町から掛合町、飯石郡飯南町にかけての地域で展開した。田儀櫻井家は鉦3ヶ所・鍛冶屋4ヶ所、仁多櫻井家が鉦2ヶ所・鍛冶屋3ヶ所、糸原家は鉦1ヶ所・鍛冶屋2ヶ所であり（鳥谷2008）、田部家の経営規模は群を抜く。

田部家がいつ頃から吉田町に屋敷地をもっていたのかについては、不明な点が多い。史料によれば、8代五左衛門が寛文2年(1662)には「町屋敷三畝」を所有していたことがわかる。その後、元和元年(1681)、元禄2年(1689)などの「町屋敷」証文があり、17世紀中葉から購入を続け、次第に屋敷地が形成されていったようである。また、元禄2年の土地証文には「川向私木こや跡に鍛冶屋こや御作り成さるべき由」とある。「川向」とあることから、本屋敷とは吉田川を挟んで対岸にあった町鍛冶屋の敷地を指すものとみられる。町鍛冶屋については、吉田町が共同で貞享2年(1685)から無運上で操業したが存続が難しかったため、9代安右衛門に経営を依頼したとみられる。「川向」の購入は、これに関わるもので、田部家が町鍛冶屋以前から大鍛冶場を経営していた可能性が高いことが指摘されている(中山2016)。

田部家が操業した鉦の発掘調査例としては、雲南市吉田町志谷鉦跡がある。本床・小舟よりなる床釣が明らかになっており、地名から貞享4年(1687)～宝永3年(1706)に操業した志谷鉦とする(吉田村教委1998)。このほかには吉田町杉谷鉦跡と大東町段鉦跡で、近世たたらが調査されている。

#### 参考文献

- 角田徳幸 2022 「たたら製鉄のあゆみ」『雲南のたたら文化』雲南市たたらプロジェクト会議
- 角田徳幸 2023 「鍛冶技術と鉄素材」『島根考古学会誌』第40集 島根考古学会
- 掛合町教育委員会 1998 『羽森第2. 第3遺跡発掘調査報告書』
- 木次町教育委員会 1998 『家ノ前鉦跡・谷口遺跡・谷サコ遺跡』
- 木次町教育委員会 2000 『平田遺跡第Ⅲ調査区』
- 木次町教育委員会 2007 『ゴマボリ遺跡・寺田Ⅰ遺跡』
- 倉内 勝・角田徳幸・松尾充晶 2025 「雲南市の製鉄遺跡とその年代」『雲南市文化財調査研究報告』第1集 雲南市教育委員会
- 島根県 1978 『土地分類基本調査 木次』
- 島根県 1982 『土地分類基本調査 頓原・多里』
- 島根県教育委員会 2009a 『六重城南遺跡・瀧坂遺跡・鉄穴内遺跡』
- 島根県教育委員会 2009b 『大志戸Ⅱ鉦跡』
- 田中義昭・石田為成 2000 「島根県横田町国竹遺跡出土の鉄斧について」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会
- 鳥谷智文 2008 「越堂鉦・掛樋鉦・聖谷鉦の歴史の変遷」『田儀櫻井家製鉄遺跡発掘調査報告書 平成16～18年度の調査』出雲市教育委員会
- 鳥谷智文 2022 「鉄師田部家と吉田のまちなみ」『雲南のたたら文化』雲南市たたらプロジェクト会議
- 中山富広 2016 「近世出雲における大鉄師成立の再検討－飯石郡吉田村田部家を事例として－」『中国四国歴史学地理学協会年報』第12号 中国四国歴史学地理学協会
- 仁多町教育委員会 1994 『日ヤケたたら跡・芝原遺跡』
- 吉田村教育委員会 1998 『春日迫たたら跡・杉谷たたら跡・志谷たたら跡』

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

田部家本屋敷は、嘉永2年(1849)の記録によれば、「三拾九間口入三十五間 田部長右衛門」とあり(鳥谷2022・2025)、長さ71m・幅64mの規模があった。

「田部家本屋敷絵図面」によれば、北東隅には御牆神社(現存)があり、大屋口を入ると内庭となる(第4図、写真図版1)。大屋口の東は番頭らが詰める「算用場」、西は当主が執務する「御主人居間」である。内庭には、「酸倉」・「酒蔵」・「作冶場」が並んでいる。「御主人居間」奥には座敷と廊下で繋がる最も広い座敷があり、「御上殿」・「冠棚」・「御次」・「三の間」・「御寝所」などと記される。その南にも「床」・「違棚」を備えた座敷があり、両者は藩主や藩役人が巡郷に訪れた際に使われたと推察される。座敷には、台所・塩増蔵などが付設される。敷地の南側には、文庫・土蔵・製鉄庫などが並んでいる(鳥谷2022)。

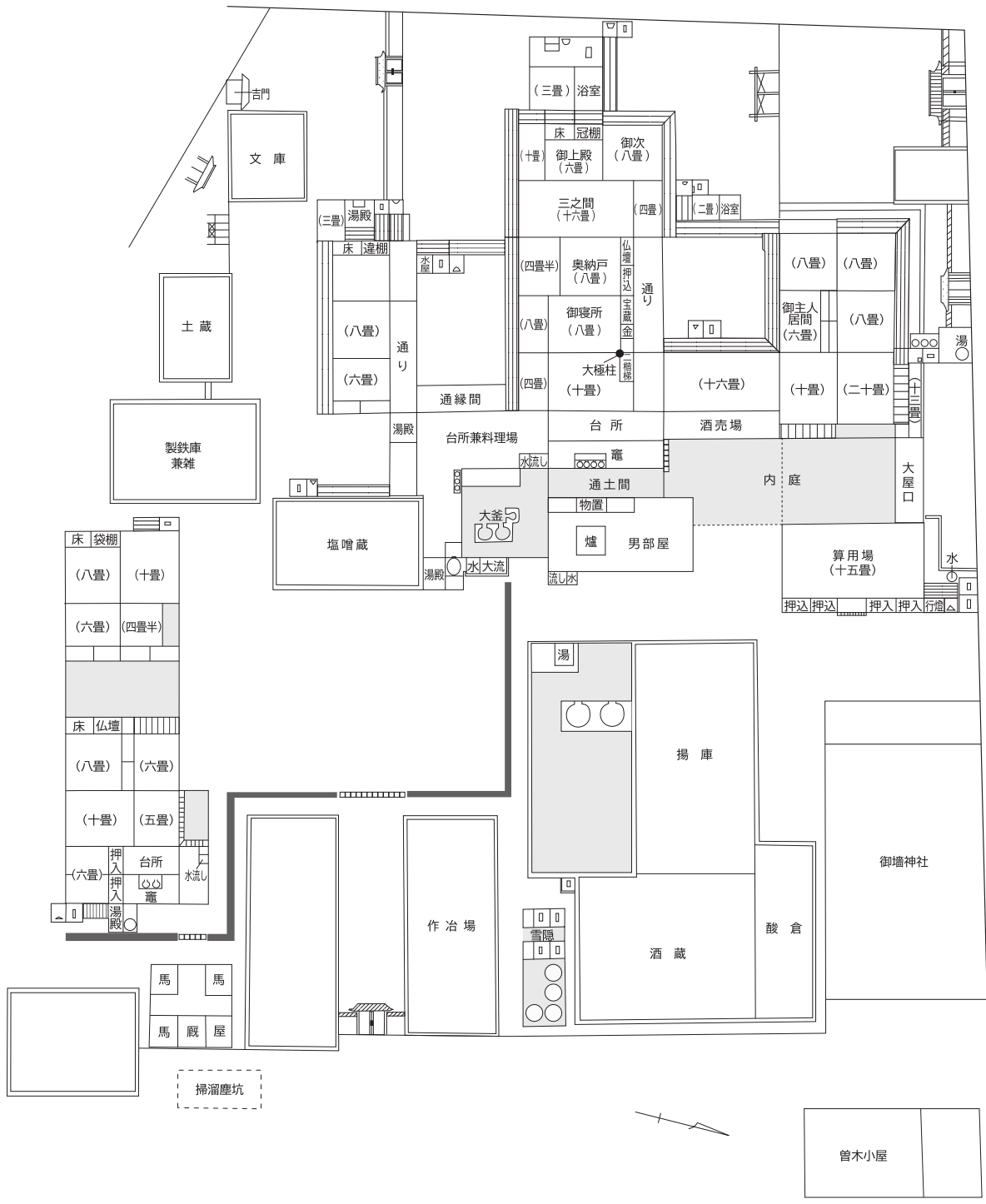
現在、本屋敷跡の敷地には、南西隅に南北棟・東西棟の土蔵2棟があるが(第5図)、該当する建物は「田部家本屋敷絵図面」にはみられない。これらが火災の際にも焼け残ったものであるとれば<sup>(1)</sup>、「絵図面」の作成後、慶応元年(1865)の火災までに建設されたことになる。

調査は、「田部家本屋敷絵図面」に描かれた建物が遺構として残存するかどうかを確認するために行った。調査区は、敷地の北側が駐車場として使われているため、南側及び西側に設けた(第5図)。

第1～3トレンチは、「御上殿」などと記される中央の座敷、もしくは南側の座敷が想定される位置に設定したものである。調査の結果、第1・2トレンチ付近では本屋敷が存在したとみられる面は改変を受けており、建物跡などは残存しないことが明らかになった。そこで敷地の造成状況を確認するために掘り下げを行ったところ、新旧2段階にわたる石垣が検出された。これは吉田川に向かって下がる緩い斜面を屋敷地とするために築かれたもので、石垣の背後に盛土をすることで平坦地としている<sup>(2)</sup>。新旧2段階にわたるのは、造成を何度も繰り返し、現在見るような屋敷地が造成されたことを示す。また、造成土からは多量の鍛冶滓や羽口など大鍛冶場の関連遺物が出土した。「田部家本屋敷絵図面」には、大鍛冶に関する記載はない。本屋敷跡とは吉田川を挟んで対面する位置には、田部家のたたら経営の拠点であった町鍛冶屋(大鍛冶場)があったことが知られるが、江戸時代のある時期までは本屋敷側でも大鍛冶操業が行われたと考えられる。第3トレンチでは、本屋敷が建っていたとみられる遺構面が確認された。一部は赤く焼けた面となっており、慶応元年の火災痕跡と考えられるが、調査範囲内では建物跡を検出することはできなかった。

第4トレンチは、調査前より石列が露出していたことから、中央座敷の西側に描かれる「浴室・雪隠」を想定して調査した。石列は、本屋敷跡の遺構面より高く原位置を保っていなかったが、遺構面には第3トレンチと同様に火災の痕跡があった。

第5トレンチは、現存する土蔵の北側に空き地があることから設定した。建物の基礎となる切石による石列が検出され、現土蔵と同様に南北棟の建物とみられるが、「絵図面」に記載はない。



第4図 田部家本屋敷見取り図





第5図 田部家本屋敷跡調査区配置図

## 第2節 第1トレンチ・第2トレンチ

### (1) 北壁土層 (第8図)

調査区北壁の土層は、最上層に整地土(1~3層)、その下に木片を多量に含む黒色土(4層)がある。調査地点には製材所があったとのことであり、後者がその痕跡とみられる。4層の下は細かい黄色土を含む褐灰色土(5層)となるが、これより下層は第1トレンチと第2トレンチで様相が異なる。

第1トレンチは、細かい黄色土・礫を含む黒褐色土(14層)、褐灰色土(15層)、礫を含む黒褐色土(18層)、小礫を含む褐色土(22層)が切り合い、繰り返し掘り返しを受ける。周囲を切られるように残る大きい円礫を含む黒褐色土(16層)からは江戸時代後期の陶磁器(第13図10)が出土しており、攪乱を免れたようだ。それより下層はさほど乱れはなく、細かい炭片・黄色土を含む暗褐色土(20層)、礫を含む褐灰色土(23層)、礫を含む黒色土(24層)、礫を含む褐灰色砂(25層)が堆積する。

第2トレンチは、5層の下、円礫を多く含む灰白色砂(10層)の上に、細かい炭を含む褐色土(6層)と細かい炭を含む黄褐色土(7層)がある。本屋敷跡の遺構面(「絵図面」に描かれた時期の生活面)ともみられるが、残存範囲は僅かであり、遺構はこの地点には残っていない。遺構面の標高は、354.0mである。黄色土粒を含む褐色土(8層)を挟んで下層の細かい炭を含む黄褐色土(9層)も生活面の可能性があるが、残存状況は良くない。その下層は、細かい炭・黄色土粒を含む暗褐色土(11層)、細かい炭片を含む暗褐色土(12層)、円礫を多く含む灰白色砂(13層)が堆積しており、13層は基盤である崖錐堆積物とみられる。

### (2) 第1トレンチ東壁土層 (第9図)

北壁の土層と同様に、最上層には整地土(1・2層)がある。これより下は、調査区の北側にみえる小礫を含む褐色土(22層)、礫を含む褐灰色土(23層)とそれより下層の3つに分けることができる。22層は南に向かい傾斜し途切れるが、これに乗るように焼土塊・炭片を含むにぶい赤褐色土(25層)、暗黄色砂が細かい層状になる褐灰色砂(26層)、スラグを含む褐灰色砂(27層)、小礫・スラグを含む黒褐色土(28層)が堆積する。23層の上にはやはり南に向かい傾斜するように、スラグ・小礫を含むにぶい赤褐色土(29層)、小礫を含む褐灰色土(30層)、木片を含む黒色土(31層)、スラグ小片(32層)がある。これらはスラグ片や焼土、炭片を含み、大鍛冶に伴う廃棄物とみられる。

25層と28層で採取した炭化物の年代測定結果は、第1表のとおりである。ともに測定年代にばらつきがあるが、25層は $1\sigma$ 暦年代範囲1636-1657calAD(58.5%)・ $2\sigma$ 1632-1663calAD(64.0%)、28層は $1\sigma$ 暦年代範囲1651-1666calAD(35.9%)・ $2\sigma$ 1642-1672calAD(47.5%)と17世紀中葉の年代が高確率となっている。

23層の下層には、粒子が細かい黒褐色砂(33層)・褐灰色砂(34層)、炭層である黒褐色土(35層)、円礫を含む灰オリブ土(36層)が堆積する。後述する新石垣の東端は、36層で埋まっている。

### (3) 第2トレンチ東壁土層 (第10図)

北壁の土層と同様に、最上層には整地土 (1～3層)、その下に木片を多量に含む黒色土 (4層) があるが、2・4層は途切れて広がらない。生活面とみられる6・7層も東壁には残っていなかった。

10層の下には小円礫を含む褐灰色土 (14層) があり、その下層で石垣が2列検出された。石垣は、新旧2段階にわたるもので、北寄りの古石垣は基盤となる崖錐堆積物の13層に据えられており、東壁では2段積み、高さ52cmである。新石垣は、その南側に1.5mのところであり、上端に向かって傾斜するように積まれる。掘り下げ面までの高さは146cm、石積みは8段を数える。

新旧石垣の間は、にぶい黄褐色砂 (15層)、黄色土小塊を含む暗褐色砂 (16層)、黄色土を含むにぶい黄褐色砂 (17層) が堆積する。特に15層は黄色砂をマール状に含んでおり、水流を使った流し込みが考えられる。新石垣の前面は、上層に小円礫を含むにぶい黄橙色砂 (18層)、小円礫を含む暗褐色砂 (19層)・浅黄色砂 (20層)、小スラグ (21層)、小円礫を含む灰白色砂 (22層) の順に堆積する。これより下層はスラグを多く含み、上から順に小スラグ (23層)、円礫・スラグを含むにぶい黄色砂 (24層)、スラグ (25層)、椀形鍛冶滓・円礫を含むにぶい黄色砂 (26層) となる。

26層で採取した椀形鍛冶滓に含まれる炭化物の年代測定結果は、第1表のとおりである。ばらつきが大きく参考値だが、 $2\sigma$  暦年代範囲は1723-1781calAD (33.8%) との結果が得られた。

### (4) 石垣 (第8～10・12図)

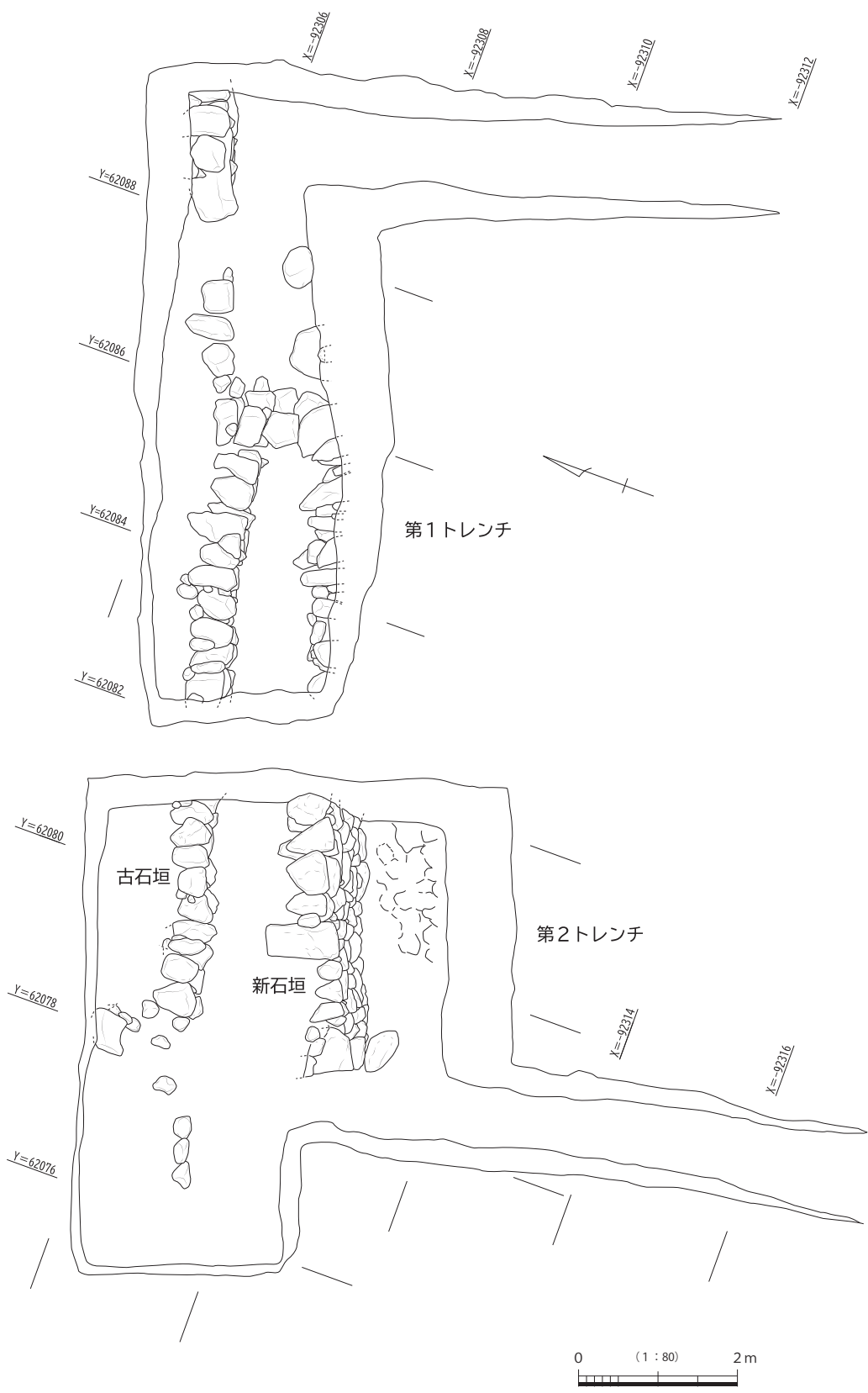
石垣は、調査範囲内では2列が確認されており、その状況から新旧2段階にわたるとみられる (第7・8図)。ともに第1トレンチから第2トレンチにかけて東西方向に直線的に構築されるが、新段階石垣は第1トレンチの中ほどで平面「L」字形に屈曲し、古段階石垣に続く位置に延びる。

古段階の石垣は、長さ11.2mある (第7・8図)。石垣は、基盤となる崖錐堆積物 (13層) の上に築かれており、地形的に高い西端は基底部の標高が353.7mで1段、低い東端は352.7mで3段である。ほぼ垂直に積まれており、高いところは高さ80cmで4段積みある。石は山石の転石とみられ、一部に椀形鍛冶滓も使われている (第9図)。石垣に椀形鍛冶滓が組み込まれているのは、古石垣の構築以前から付近で大鍛冶の作業が行われていたことを示している。

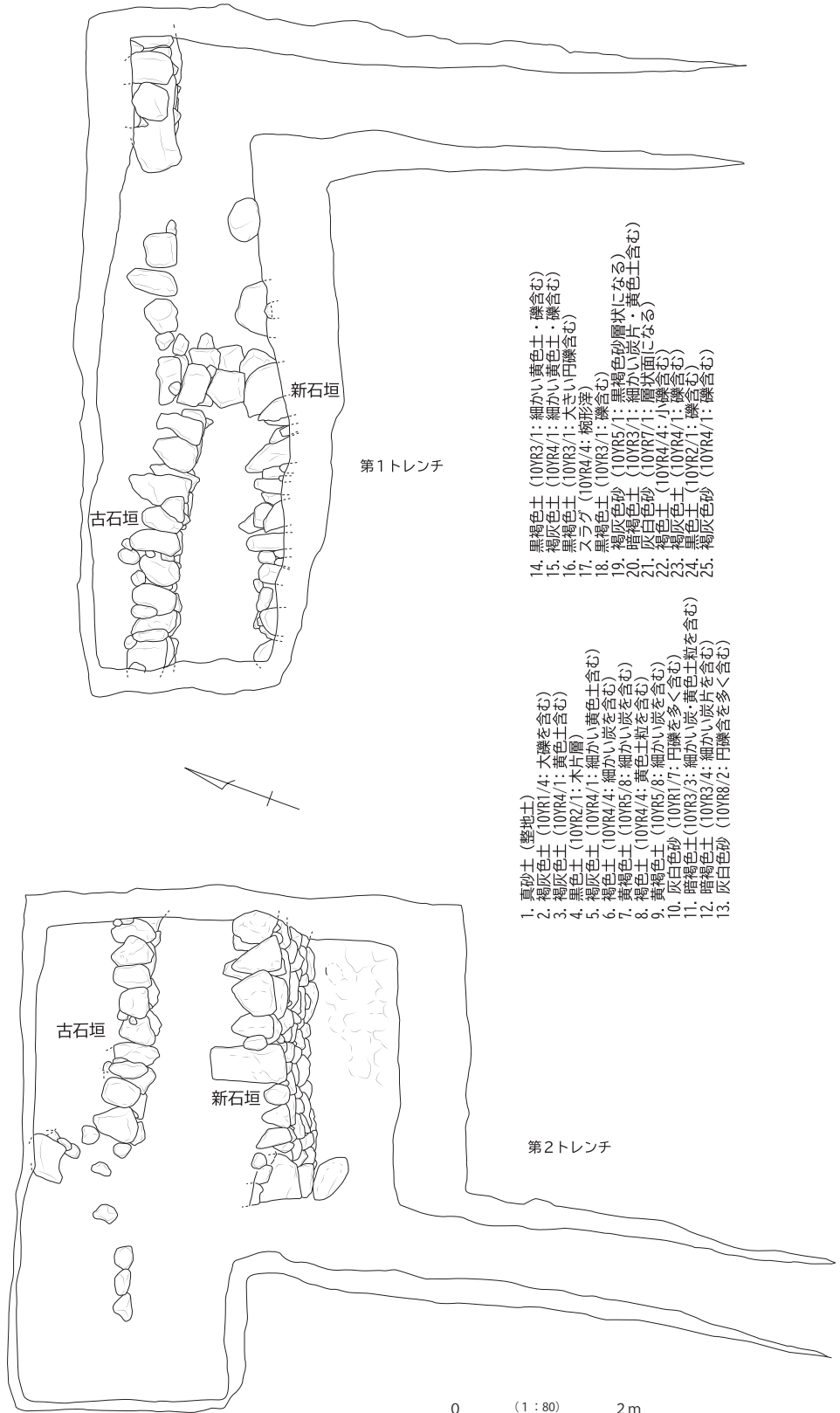
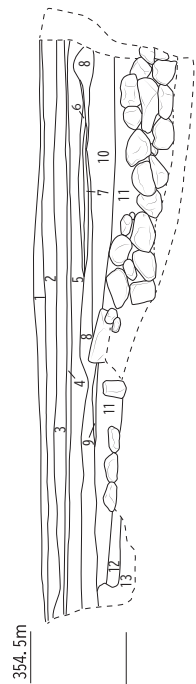
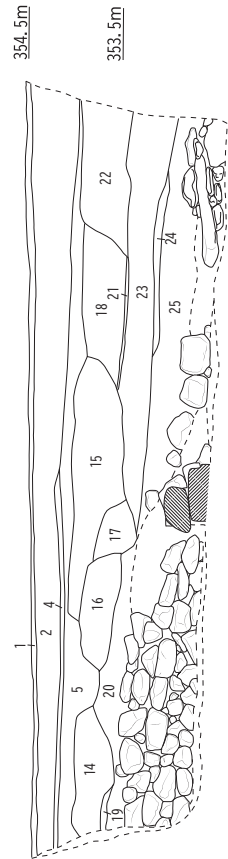
新段階の石垣は、検出した範囲内で長さ15.6mある (第7・8図)。西端部は、崖錐堆積物にすり付けるように積み、基底部の標高は352.8m、3段積みである (第11図)。基底部は東に向かって下がるものとみられるが、第2トレンチでは石垣前面に椀形鍛冶滓が埋められており、確認はできなかった。石は、山石の



第6図 第2トレンチで出土した鍛冶滓

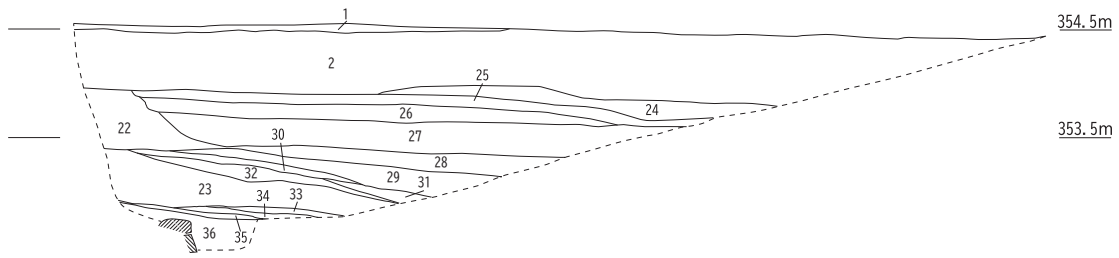


第7図 第1・2トレンチ実測図(1)

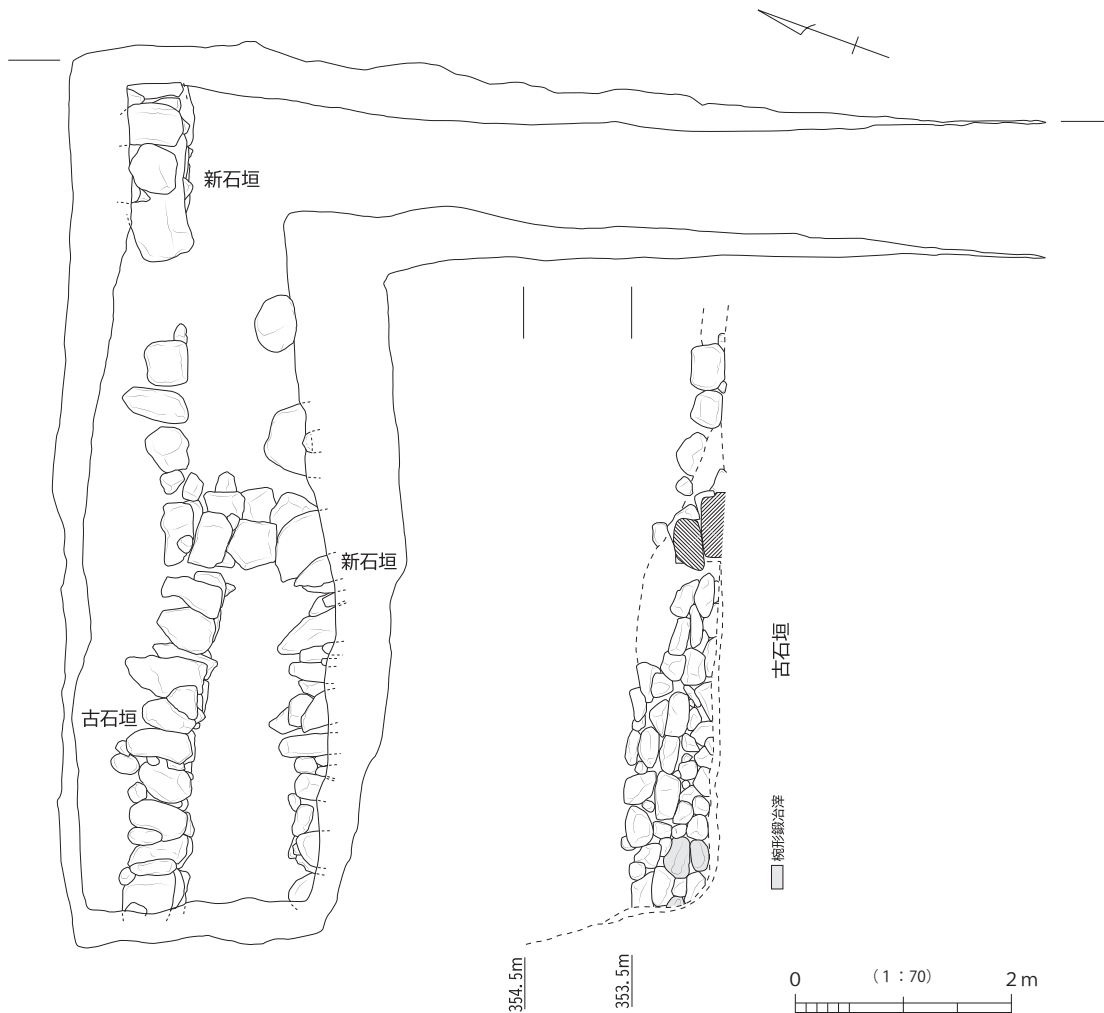


- 1. 真砂土 (整地土)
- 2. 褐灰色土 (10VR1/4: 大礫を含む)
- 3. 褐灰色土 (10VR4/1: 黄色土を含む)
- 4. 黒色土 (10VR2/1: 木片層)
- 5. 褐灰色土 (10VR4/1: 細かい黄色土を含む)
- 6. 褐色土 (10VR4/4: 細かい灰を含む)
- 7. 黄褐色土 (10VR5/8: 細かい灰を含む)
- 8. 褐色土 (10VR4/4: 黄色土粒を含む)
- 9. 黄褐色土 (10VR5/8: 細かい灰を含む)
- 10. 灰白色砂 (10VR1/7: 円礫を多く含む)
- 11. 暗褐色土 (10VR3/3: 細かい灰・黄色土粒を含む)
- 12. 暗褐色土 (10VR3/4: 細かい灰片を含む)
- 13. 灰白色砂 (10VR8/2: 円礫を多く含む)
- 14. 黒褐色土 (10VR3/1: 細かい黄色土・礫を含む)
- 15. 褐灰色土 (10VR4/1: 細かい黄色土・礫を含む)
- 16. 黒褐色土 (10VR3/1: 大きい円礫を含む)
- 17. スラッグ (10VR4/4: 楕形礫)
- 18. 黒褐色土 (10VR3/1: 礫を含む)
- 19. 褐灰色砂 (10VR5/1: 黒褐色砂層状になる)
- 20. 暗褐色土 (10VR3/1: 細かい灰を含む)
- 21. 灰白色砂 (10VR7/1: 礫を含む)
- 22. 褐色土 (10VR4/4: 小礫を含む)
- 23. 黒褐色土 (10VR2/1: 礫を含む)
- 24. 黒褐色土 (10VR4/1: 礫を含む)
- 25. 褐灰色砂 (10VR4/1: 礫を含む)

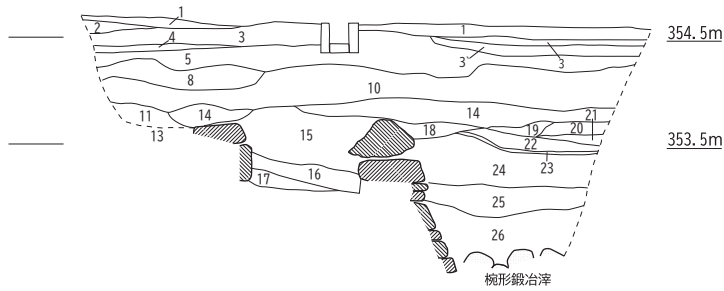
第8図 第1・2トレンチ実測図 (2)



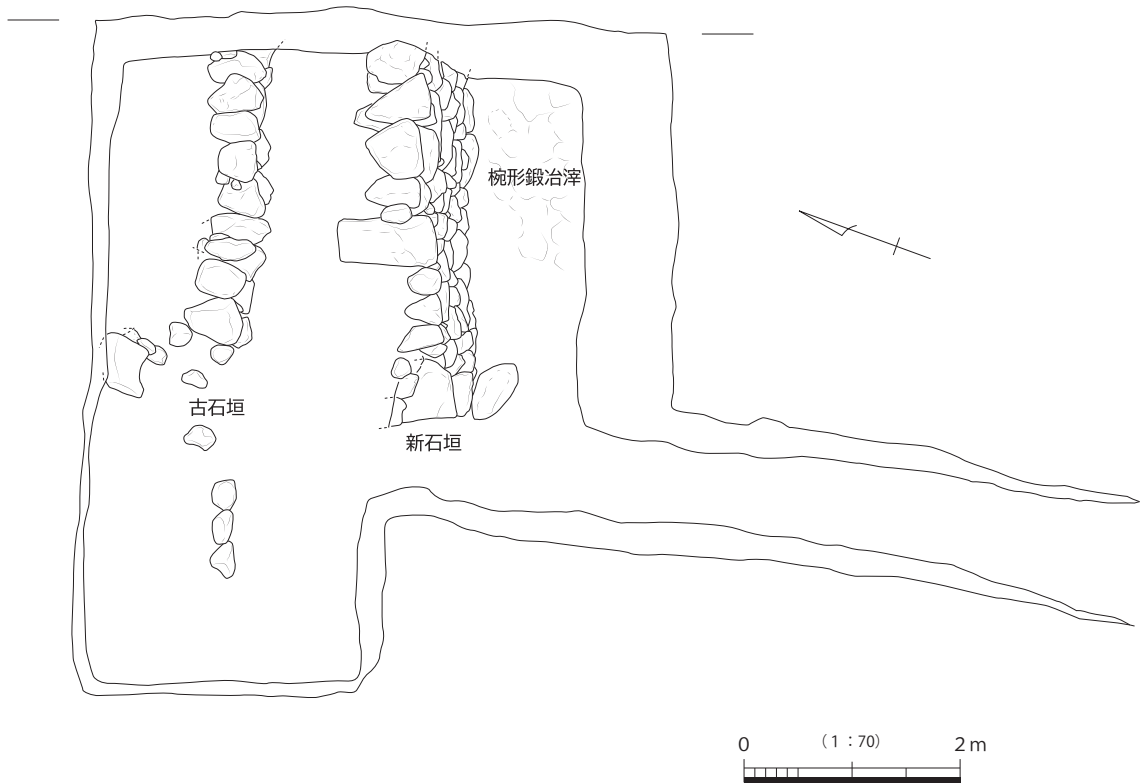
- |                                  |                               |
|----------------------------------|-------------------------------|
| 1. 真砂土（整地土）                      | 29. にがい赤褐色土（5YR: スラグ・小礫含む）    |
| 2. 褐灰色土（10YR1/4: 大礫含む）           | 30. 褐灰色土（10YR5/1: 小礫含む）       |
| 22. 褐色土（10YR4/4: 小礫含む）           | 31. 黒色土（10YR2/1: 木片含む）        |
| 23. 褐灰色土（10YR4/1: 礫含む）           | 32. スラグ（10YR4/4: スラグの小片が層になる） |
| 24. 褐灰色土（10YR5/1: 炭・焼土含む）        | 33. 黒褐色砂（10YR3/1: 粒子細かい）      |
| 25. にがい赤褐色土（5YR4/4: 焼土塊・炭片含む）    | 34. 褐灰色砂（10YR5/1: 粒子細かい）      |
| 26. 褐灰色砂（10YR4/1: 暗黄色砂が細かい層状になる） | 35. 黒褐色土（10YR3/1: 炭層）         |
| 27. 褐灰色土（10YR5/1: スラグ含む）         | 36. 灰オリーブ土（5Y5/2: 円礫含む）       |
| 28. 黒褐色土（10YR3/1: 小礫・スラグ含む）      |                               |



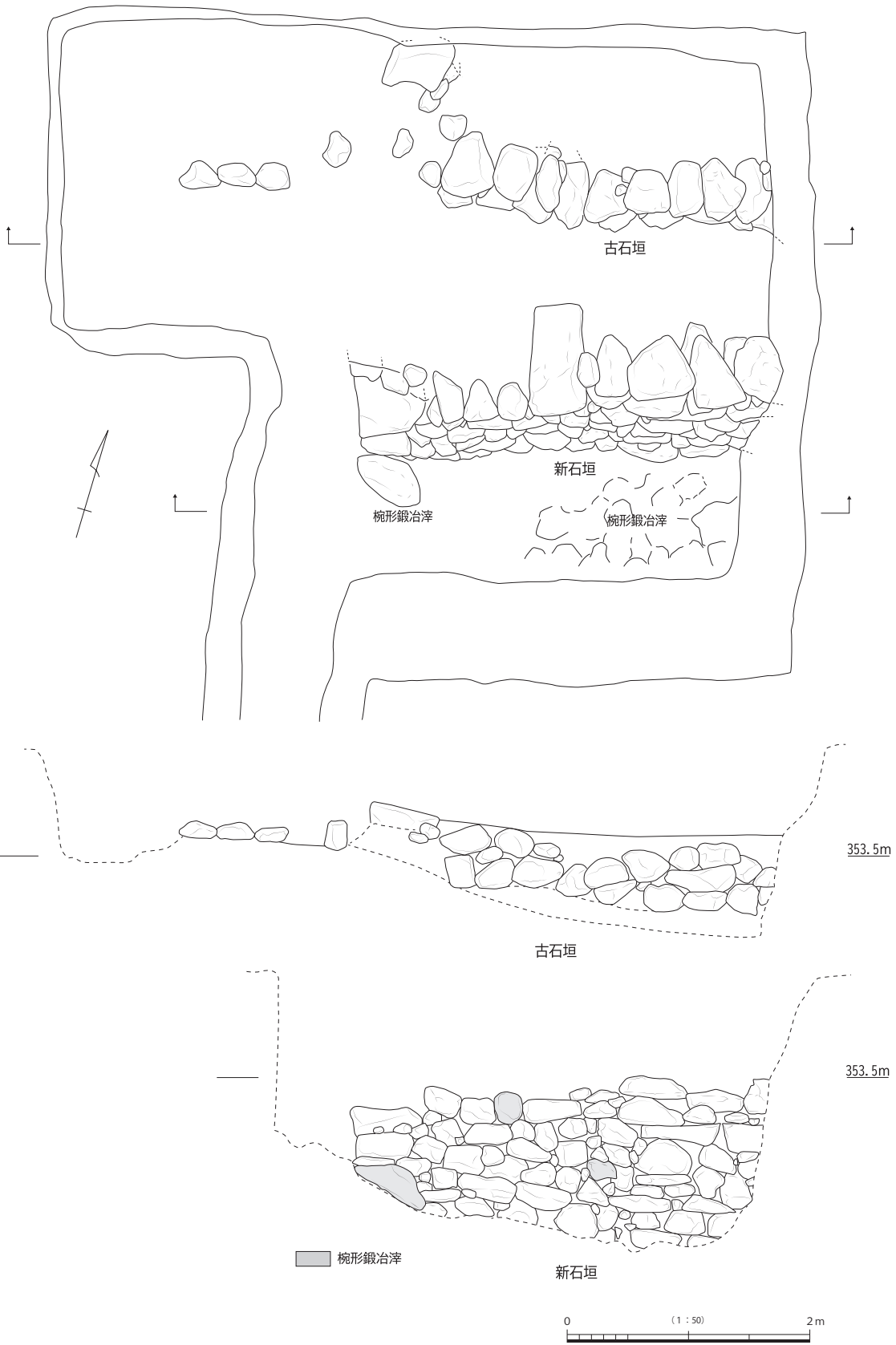
第9図 第1トレンチ実測図



- |                                       |                                   |
|---------------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 真砂土 (整地土)                          | 16. 暗褐色砂 (Hue10YR3/3: 黄色土小塊含む)    |
| 2. 砂利層 (整地土)                          | 17. にぶい黄褐色砂 (Hue10YR4/3: 黄色土を含む)  |
| 3. 褐灰色 (Hue10YR4/1: 黄色土)              | 18. にぶい黄褐色砂 (Hue10YR6/3: 小円礫含む)   |
| 3. 明黄褐色土 (Hue10YR7/6: 整地土)            | 19. 暗褐色砂 (Hue10YR3/3: 小円礫含む)      |
| 4. 黒色土 (Hue10YR2/1: 木片層 製材所に伴うものか)    | 20. 浅黄色砂 (Hue2.5Y7/3: 小円礫含む)      |
| 5. 褐灰色土 (Hue10YR4/1: 細かい黄色土粒含む)       | 21. 小スラグ (Hue10YR4/4: 小スラグ層)      |
| 8. 褐色土 (Hue10YR4/4: 黄色土粒含む)           | 22. 灰白色砂 (Hue2.5Y8/1: 小円礫含む)      |
| 10. 灰白色砂 (Hue10YR7/1: 円礫を多く含む)        | 23. 小スラグ (Hue10YR4/4: 小スラグ層)      |
| 11. 暗褐色土 (Hue10YR3/3: 細かい炭片、黄色土粒含む)   | 24. にぶい黄色砂 (Hue10YR6/3: 円礫・スラグ含む) |
| 13. 灰白色砂 (Hue10YR8/2: 円礫多く含む 地山か)     | 25. スラグ (Hue10YR4/4: スラグ層)        |
| 14. 褐灰色土 (Hue10YR6/1: 小円礫含む)          | 26. にぶい黄色砂 (Hue10YR6/3: 椀形滓・円礫含む) |
| 15. にぶい黄褐色砂 (Hue10YR5/3: 黄色砂マーブル状に含む) |                                   |



第10図 第2トレンチ実測図(1)

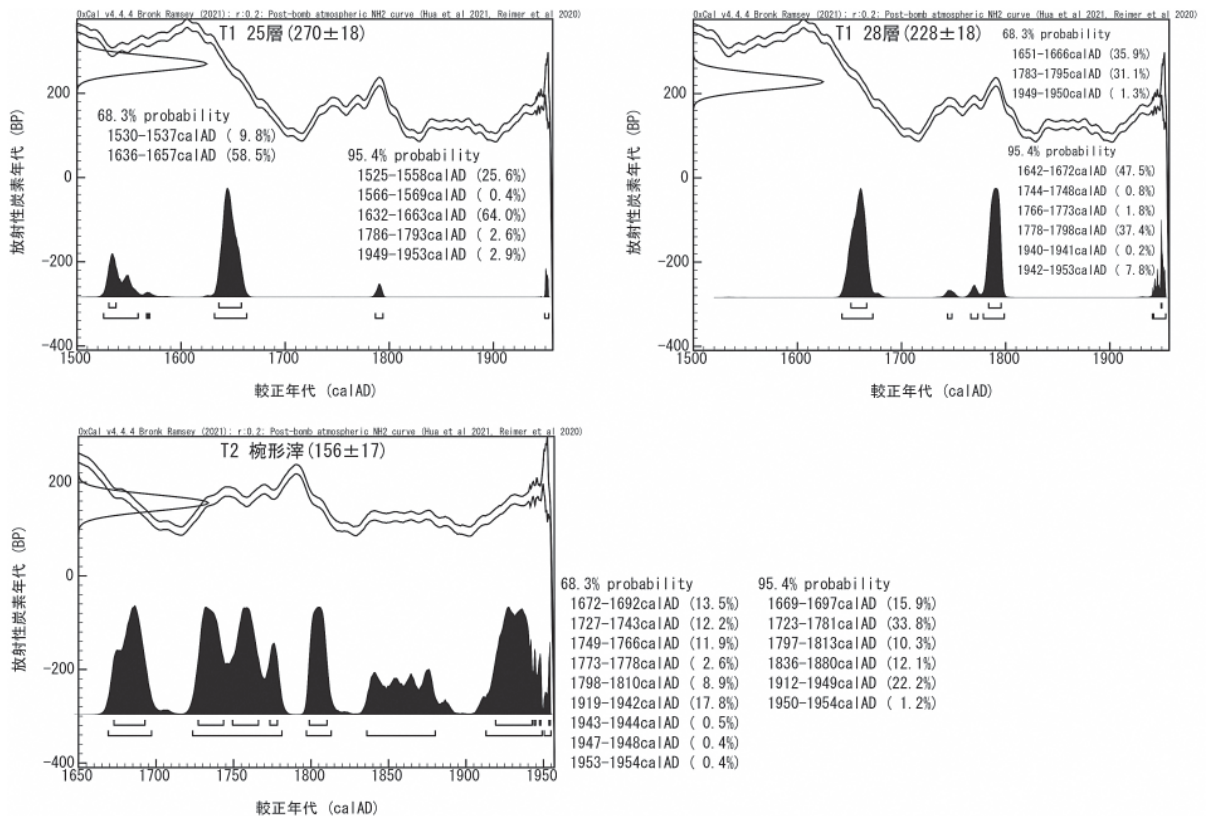


第11図 第2トレンチ実測図(2)



第 1 表 第 1・2 トレンチ採集炭化物の年代測定結果

試料名	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正無年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	14C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	14 $\delta^{13}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
T1 25 層	-25.54 $\pm$ 0.19	279 $\pm$ 18	270 $\pm$ 18	270 $\pm$ 20	1530-1537calAD ( 9.8%) 1636-1657calAD (58.5%)	1525-1558calAD (25.6%) 1566-1569calAD ( 0.4%) 1632-1663calAD (64.0%) 1786-1793calAD ( 2.6%) 1949-1953calAD ( 2.9%)
T1 28 層	-25.16 $\pm$ 0.22	231 $\pm$ 19	228 $\pm$ 18	230 $\pm$ 20	1651-1666calAD (35.9%) 1783-1795calAD (31.1%) 1949-1950calAD ( 1.3%)	1642-1672calAD (47.5%) 1744-1748calAD ( 0.8%) 1766-1773calAD ( 1.8%) 1778-1798calAD (37.4%) 1940-1941calAD ( 0.2%) 1942-1953calAD ( 7.8%)
T2 26 層 椀形鍛冶滓	-25.16 $\pm$ 0.22	159 $\pm$ 17	156 $\pm$ 17	155 $\pm$ 15	1672-1692calAD (13.5%) 1727-1743calAD (12.2%) 1749-1766calAD (11.9%) 1773-1778calAD ( 2.6%) 1798-1810calAD ( 8.9%) 1919-1942calAD (17.8%) 1943-1944calAD ( 0.5%) 1947-1948calAD ( 0.4%) 1953-1954calAD ( 0.4%)	1669-1697calAD (15.9%) 1723-1781calAD (33.8%) 1797-1813calAD (10.3%) 1836-1880calAD (12.1%) 1912-1949calAD (22.2%) 1950-1954calAD ( 1.2%)



第 12 図 炭化物の暦年較正結果

転石が主体で、一部に椀形鍛冶滓や川原石も使われている。第1トレンチでは西側で石垣の裏側を確認しており、中ほどで屈曲して東へと続く。屈曲部は石垣が低く2段積みで、高さ45cmである。東端部は基底部の標高が352.5mで、高さ40cm、小ぶりの石を3～4段に積む。

新段階石垣の前面では、狭い調査範囲ながら、夥しい量の鉄滓が出土した。これらはすべて大鍛冶に伴う椀形鍛冶滓で、小片もあるが、火窟で生じた際の実原形を留めるものもある。こうした状況からすれば、付近に大鍛冶場があり、その操業により排出された鍛冶滓と考えられる。

#### (5) 出土遺物 (第13・14図)

陶磁器(第13図・第14図14～22)と、大鍛冶関係遺物(第14図23～25)がある。陶磁器は、慶応元年(1865)の火災以前に行われた屋敷地の造成に伴うものとみられる。また、大鍛冶関係遺物は、羽口と火窟の形状がわかる椀形鍛冶滓を図化した。

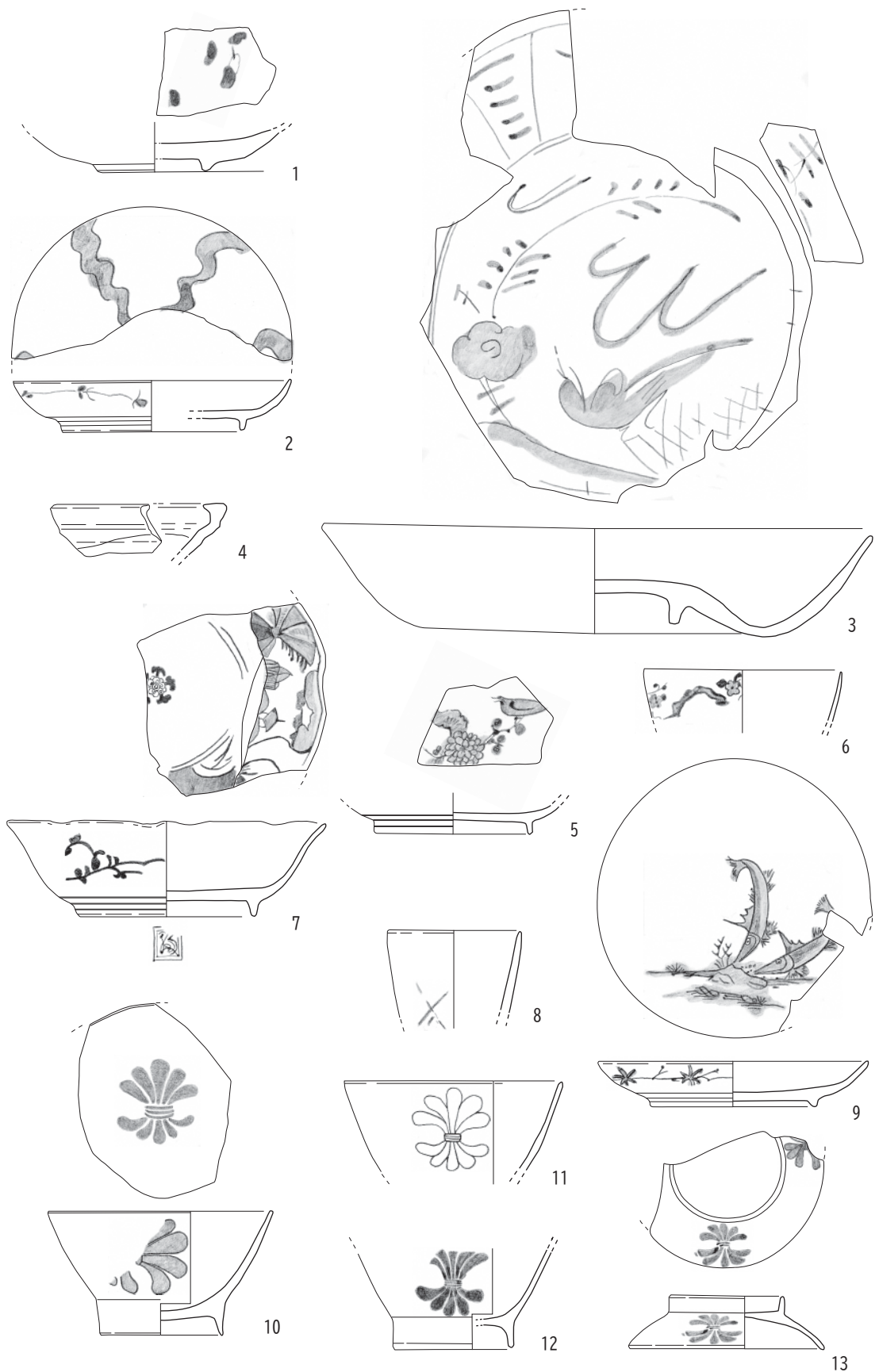
第13図1は肥前皿で、内面に草花文がある。1640～1650年代のものとみられる<sup>3)</sup>。2は肥前皿で、内面によろけ縞文、外面に蔦草文がある。17世紀後葉～18世紀初頭とみられる。3は肥前花鳥文芙蓉手大皿である。復原口径27.7cm・同器高5.2cmで、底面は大きく焼きひずみがある。佐賀県吉田2号窯に類品があり(九州近世陶磁学会2000、132頁)、1640～1650年代のものである。4は唐津播鉢である。口縁は内側に若干尖らせ、施釉される。17世紀前半とみられる。5は肥前皿で花鳥文、6は肥前猪口で梅花文があり、ともに17世紀後葉～18世紀初頭のものともみられる。

7は肥前碗で口縁は輪花、内面は山水文、見込みに手描きの五弁花、外面に蔦草文、高台内に二重角渦福文がある。1710～1720年代のものとみられる。8は肥前猪口で、草花文がある。佐賀県広瀬向2号窯に類品があり(九州近世陶磁学会2000、170頁)、1750～1780年代のものである。9は肥前一枚絵皿で、双魚文があり、18世紀後葉～19世紀第1四半期とみられる。

10～12はいわゆる広東碗で、13はその蓋である。10は内外面に結綿文が入るが、外面は横向きになる。結綿文は外面は濃紺の縁取りで内側を薄い紺色でダミ充填するのに対し、内面は縁取りがない紺色の結綿文があり、輪郭線を飛ばす墨弾きの手法がとられる。11は結綿文が紺色の輪郭線のみで描かれ、本来は色絵であった可能性がある。12・13は墨弾きによる結綿文がある。結綿文<sup>4)</sup>は、田部家の家紋であり、その描き方に多様性があることから、肥前の窯元が同家の注文によって詠えた可能性が考えられる<sup>5)</sup>。1800～1810年代のものとみられる。

14は肥前皿で、蛇ノ目凹型高台、一枚絵で山水文がある。15は肥前小皿で机・文房具文がある。17は広東碗であるが、結綿文は入らない。14・15・17は1800年代初頭とみられる。16は肥前猪口で、草花文がある。18は布志名のいわゆるぼてぼて茶碗である。淡緑色に施釉され、削り出し高台である。16・18は19世紀第2四半期とみられる。19～21は瀬戸美濃端反り碗で、19・20は蓋である。外面は山水文・草花文、20の口縁内面は雷門で、1830～1840年代とみられる。22は石見播鉢で、播目を含め、暗褐色の施釉がある。1800年代のものである。

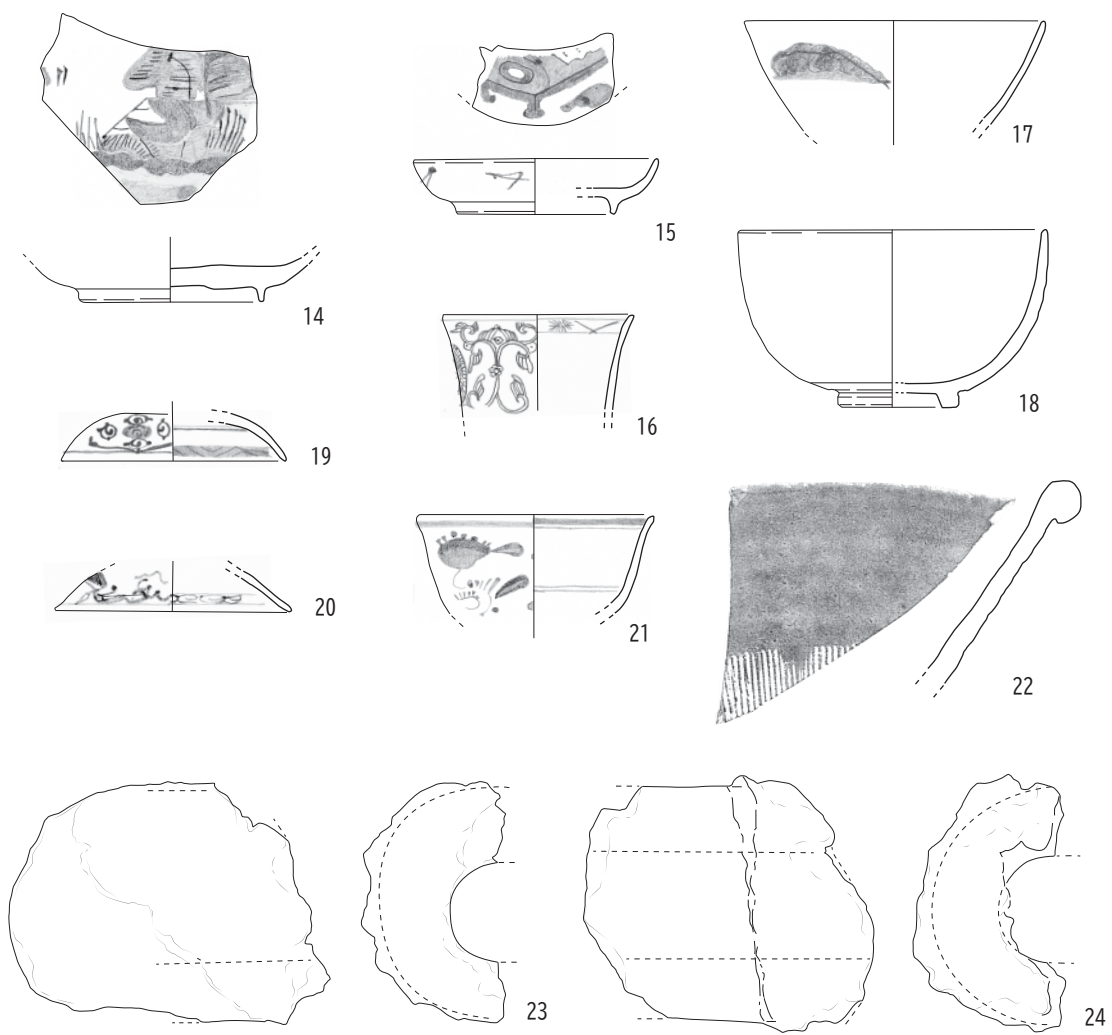
23・24は羽口である。23は外径9.4cm・内径4.2cmで、先端部は斜めに熔融しガラス質滓が付着する。24は外径9.3cm・内径3.9cmで、23とほぼ同形同大である。先端部は斜めに熔融しガラス質滓となり、



トレンチ1 (2.3.5.6.8~13)  
トレンチ2 (1.4.7)

0 (1:3) 10cm

第13図 第1・2トレンチ出土遺物実測図(1)



0 (1:3) 10cm



25 第1トレンチ (14~22, 24)  
第2トレンチ (23, 25)

0 (1:4) 20cm

第14図 第1・2トレンチ出土遺物実測図(2)

鉄分が付着する。25は椀形鍛冶滓である。周囲に欠損がなく、火窪の大きさを示すもので、長さ60.0cm・幅33.0cm・厚さ21.0cmである。底面は丸みを帯び炉床土が付着しており、全体に木炭の噛み込みや木炭痕がみられる。

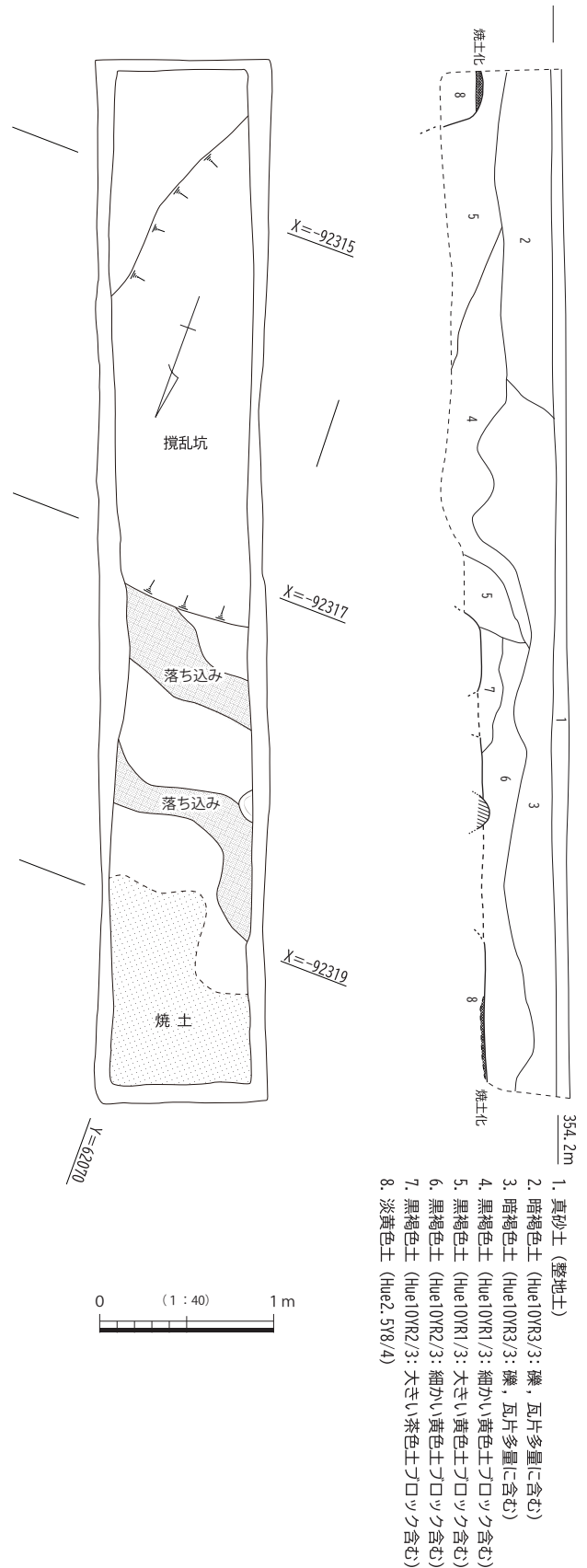
### 第3節 第3トレンチ

調査区の北半部と南端部には、標高353.8mのところ淡黄色土の整地面（8層）がある。表面が赤く焼けていることから、慶応元年（1865）の火災痕跡である可能性が考えられる。そうであるとすれば、本屋敷はこの整地面の上に建設されたとみられる。

北半部では、幅20～30cmほどの不整形な溝状の落ち込みがあるが、平面形を検出するに留めた。調査区の中央から南側には大きな攪乱坑がある。

東壁土層は、真砂土（1層）の下には礫・瓦を多量に含む暗褐色土（2・3層）があり、これらは近代以降の整地土とみられる。北半部はその下層に細かい黄色土ブロックを含む黒褐色土（6層）、大きい茶色土ブロックを含む黒褐色土（7層）の順に堆積しており、これらが火災の痕跡がある整地面（8層）を覆う。攪乱土である黒褐色土（4・5層）は、この6層と7層を切り込むように掘り込まれている。

第3トレンチでは、慶応元年の火災痕跡とみられる整地面が検出された。敷地の周辺部においては、田部家本屋敷跡の遺構が残存することを窺わせる。



第15図 第3トレンチ実測図

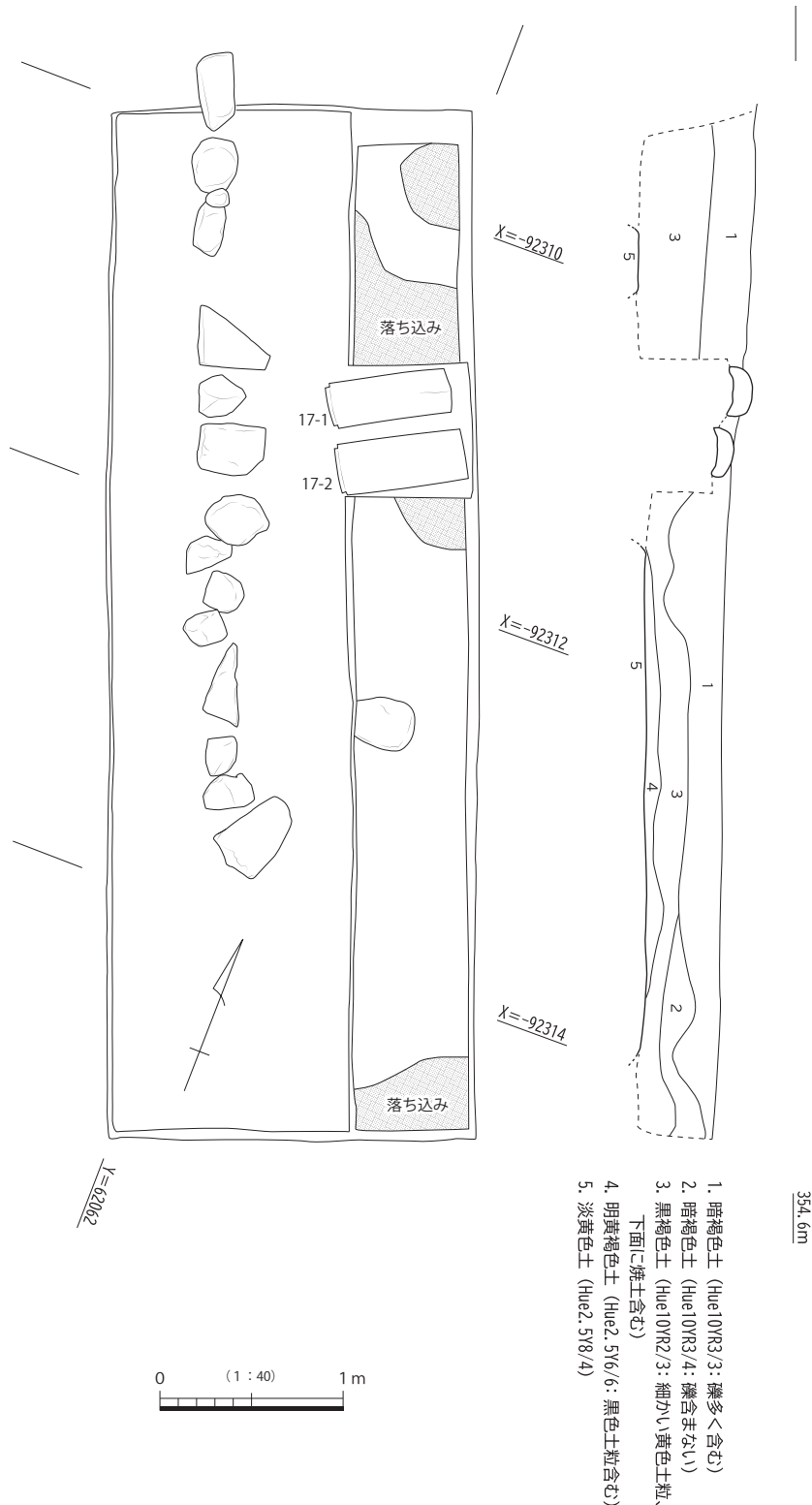
## 第4節 第4トレンチ

調査前から石列が露出しており、建物跡等の遺構が想定されたことから設定した調査区である。

調査の結果、この石列は、礫を含む暗褐色土（1層）中に並べられており、原位置ではないことが明らかになった。石列とほぼ同じ高さには、来待石製の熨斗棟石が置かれていた。熨斗棟に来待石を使う建物は現存する土蔵にもみられるので、本屋敷に使われていた可能性も考えられる。

調査区の東側にサブトレンチを設定して掘り下げると、標高 353.8m のところに淡黄色土（5層）があり、その直上では焼土も確認された。第3トレンチの整地面と高さがそろうことなどから、慶応元年の火災に相当する面とみられる。不整形な落ち込みも確認でき、何らかの遺構とも考えられるが、掘り下げは行っていない。

東壁土層は、上層から礫を含む暗褐色土（1層）、暗褐色土（2層）、細かい黄色土粒を含む黒褐色土（3層）、黒色土粒を含む明黄褐色土（4層）、そして整地面である淡黄色土（5層）となる。5層の覆土である3層は、下面に焼土を含んでいる。

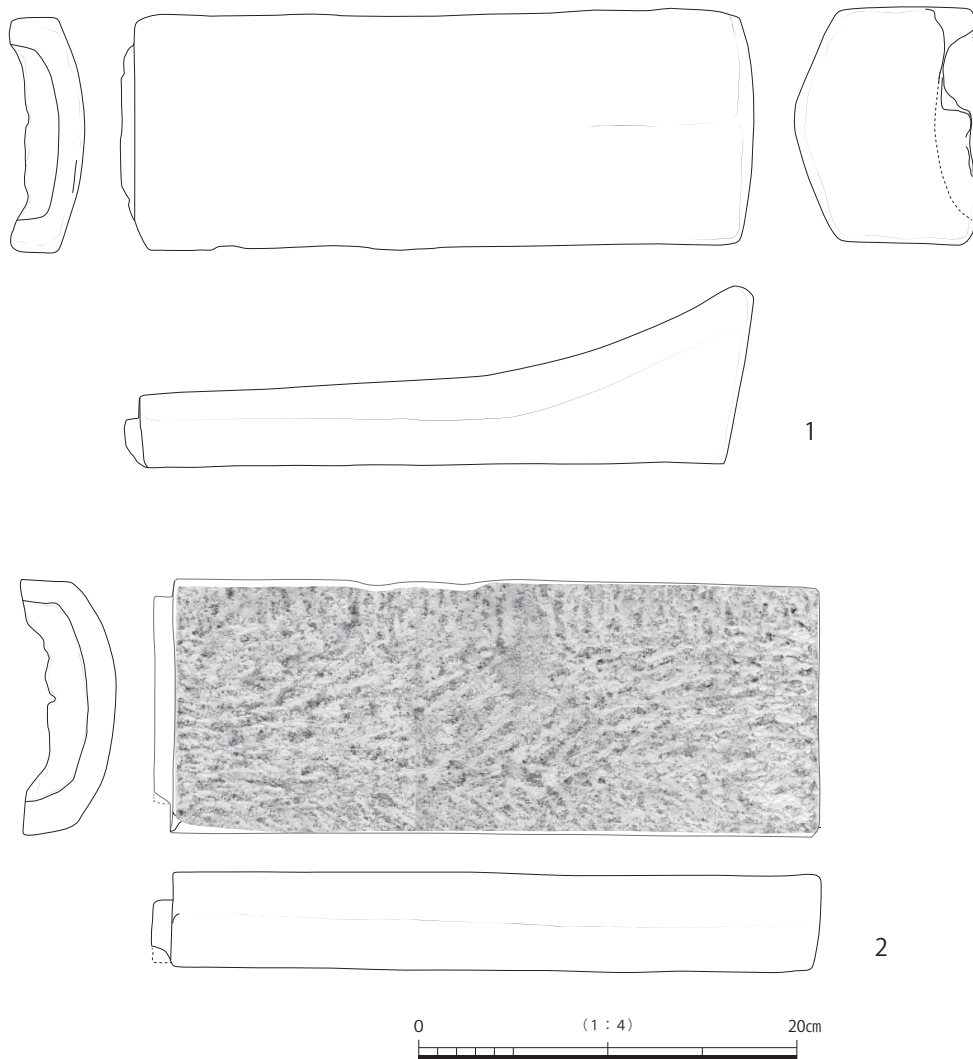


第16図 第4トレンチ実測図

熨斗棟石は2種類あり、ともに来待石製である。図化したもの以外にも多数あることから、建物の廃絶後に集められ、積み置かれたとみられる。

第17図1は大きく反りがあり、棟端部に使用されたものである。長さ66.6cm・幅24.6cm、反りのある端部の高さは19.0cmあり、中軸に稜が付く。反対側の端部は厚さ7.8cmであるが、深さ2cmほどの割り込みが設けられており、隣り合う熨斗棟石と組み合わせる構造となる。下面には深さ5cmほどの内割りがある。加工痕は上面、内割り面ともに認められる。前者が目立たないのは風化の影響もあるが、調整されたとも考えられる。

2は両端とも平坦で、長さ70.0cm・幅26.3cm・厚さ5.0cmである。下面には深さ7cmほどの内割りがあり、一方の端部に2.8cmの割り込みがある。上面・下面とも加工痕が顕著に残る。隣り合う熨斗棟石に割り込みを差し入れて連結して、並べられた。



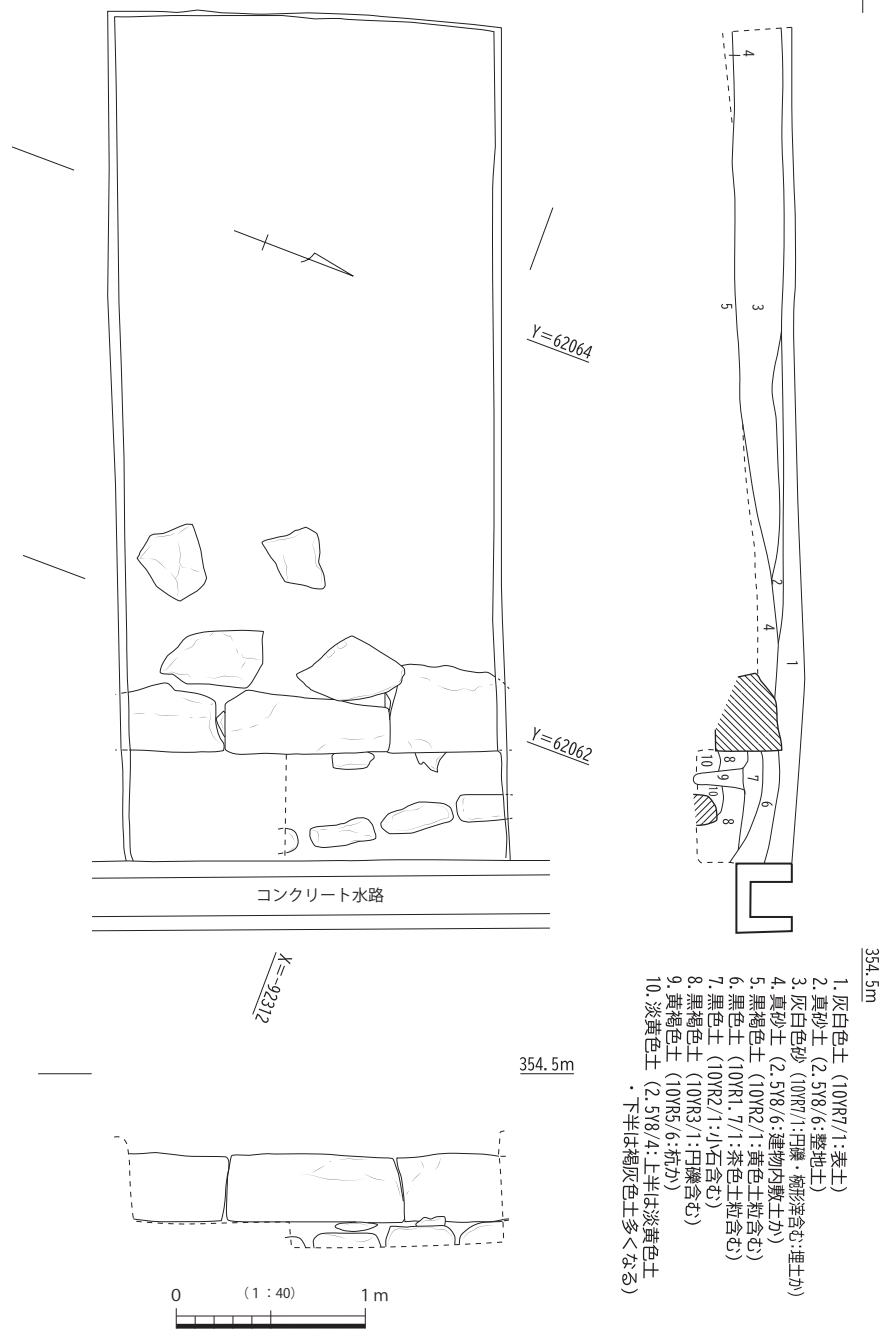
第17図 第4トレンチ出土熨斗棟石実測図

## 第5節 第5トレンチ

敷地の南西隅に現存する土蔵（第5図）の北側には、屈曲した排水溝がある。かつて建物が存在した可能性があることから、設定した調査区である。

表土・整地土である灰白色土（1層）、真砂土（2層）、円礫・椀形滓を含む灰白色砂（3層）を除去したところ、丁寧に加工された切石を基礎に使う建物跡が確認された。切石は、高さ40cmほどで、調査区内では南北方向に3個並んで検出された。切石下面の標高353.8mであり、第3・4トレンチの整地面の高さともほぼそろろう。「田部家本屋敷絵図面」には、これに該当する建物の記載はないが、同じ整地面に建設されていることからすれば、本屋敷と同時期の建物とみられる。切石の表面には細かい亀裂があるほか、赤くなったところがあった。これが火災により被熱した痕跡とすれば、絵図面の作成後、慶応元年の火災までに建設された建物と考えられる。

建物の規模は、調査範囲内では不明だが、現存する土蔵よりは梁行が一回り大きい。建物跡の内部には真砂土（4層）が敷かれている。切石列の東側ではこれに平行するように転石による列石があり、その間に淡黄色土（10層）を入れる。調



第18図 第5トレンチ実測図



査範囲内では判然としないが、建物の周囲が犬走り状になり、列石は雨落溝の側壁であることも想定できそうである。

切石の東側は、茶色土粒を含む黒色土（6層）、小石を含む黒色土（7層）、円礫を含む黒褐色土（8層）で埋まる。調査区北壁にかかるように、8層から杭状の落ち込み（黄褐色土：9層）が確認できたが、その性格は不明である。

#### 註

- (1) 現存する土蔵の白壁は黒く煤けている。現在、施設を管理する株式会社 JUTOKU 岩田基宏常務取締役によれば、これは火災の影響によるとの所伝があるという。
- (2) 田部家と同じ本町通りに面する若槻屋は、手狭になった屋敷地を広げるために、安政6年（1859）に屋敷裏手の畑を譲り受け、敷地の高さを揃えるために石垣を組んで盛土した記録がある（鳥谷 2025）。こうした工法により敷地造成が広く行われていたことが窺える。
- (3) 陶磁器の年代については、西尾克己氏・阿部賢治氏よりご教示を得た。
- (4) 田部家は、9代安右衛門の頃（宝永～享保13年（1728）頃）、松江藩の命により家号を「前綿屋」と号するようになった（鳥谷 2022）。結綿文（ゆいわたもん、たばねのし）は、これに因むものとみられる。
- (5) 阿部賢治氏のご教示による。

#### 参考文献

九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会 10 周年記念』

鳥谷智文 2022 「鉄師田部家と吉田まちなみ」『雲南のたたら文化』雲南市たたらプロジェクト会議

鳥谷智文 2025 「19 世紀における吉田町の様相—「嘉永 2 年（1849）飯石郡吉田町図面」及び「図面目録」を中心に—」『雲南市文化財調査研究報告』第 1 集 雲南市教育委員会

## 第4章 まとめ

田部家本屋敷は、「御主人居間」をはじめ、藩主や藩役人の饗応に使われたとみられる「御上殿」、「文庫」、「製鉄庫」などが建ち並び、鉄師頭取を務めた同家の家格にふさわしい建物であった。慶応元年（1865）の火災により焼失した後に再建されることはなかったが<sup>(1)</sup>、敷地はその後も様々な事業に使われてきた。そのため、第1・2トレンチを設定した敷地の中央部は大きく改変されており、「田部家本屋敷絵図面」に描かれた「座敷」をはじめとした建物群は確認できなかった。しかしながら、第3～5トレンチを設定した周縁部には整地面が残っていた。慶応年間の火災を思わせる痕跡もみられたことから、周縁部においては、「田部家本屋敷絵図面」に関連する建物などの遺構が残存する可能性がなおも考えられる。

一方、今回の調査では、本屋敷の敷地造成がどのように進められたのかを示す手がかりが得られた。吉田町は、明暦3年（1657）の「飯石郡吉田村御検地帳」によれば、町屋敷67筆の記載があり、この頃には街並みの原形が形成されていた（相良2011）。田部家による吉田町の町屋敷購入に関する史料は、寛文2年（1662）8月の「売申町家屋敷之事」が最も古く、元禄5年（1692）までに町屋敷9軒を購入したことが知られる（相良2011・2012a）。同家は、1690年代以降、鉄山や鉄穴とともに屋敷地や田畑を数多く購入するが、1730年代には一区切りついたとされている（中山2016）。元禄12年（1699）には「相建候本宅後口塩噌蔵」と本宅の後口に「塩噌蔵」があるとの所伝もあり、この「本宅」が本屋敷であるとすれば整備が進んでいたことが窺える<sup>(2)</sup>。

本屋敷の敷地は、栃山の山麓に形成された崖錐の裾部に当たるところに位置する。旧地形は吉田川に向かって傾斜する緩い斜面であったとみられ、第2トレンチの最下層では南西に向かって下がる砂礫層が確認された。こうした緩斜面を屋敷地とするには、斜面に石垣を構築し背後に盛土して平坦面を造成する必要がある。第1・2トレンチで検出された石垣は、その過程を示すものといえる。敷地は、嘉永2年（1849）には「三拾九間口入三十五間」（長さ71m・幅64m）と記され（鳥谷2022）、現在と同規模であることから、幕末にはほぼできあがっていたようだ。今回、限られた調査範囲内であるにもかかわらず、新旧2列の石垣が明らかになったことは、その姿が造成を繰り返した結果であることを窺わせる。

第1・2トレンチで出土した陶磁器は、17世紀中葉から19世紀中葉のものである。「田部家本屋敷絵図面」に描かれた建物群があったとみられる面より下層で出土したことから、それ以前の施設で使われたものとみられ、時期的にも整合する。第1トレンチの下層、新石垣の南側で出土した肥前皿（第13図2）は17世紀後葉～18世紀初頭、肥前花鳥文芙蓉手大皿（3）は1650～70年代、肥前一枚絵皿（9）は18世紀後葉～19世紀前葉と推定される。前2者は田部家が吉田町の町屋敷の購入を始めた頃とほぼ符合する年代である。石垣より上層は17世紀のものも含まれるが、18世紀～19世紀中葉のものが中心となる。肥前広東碗（第13図10～13）は1800～1810年代で、田部家の結綿

文が施されており、調査地が田部家の屋敷地であることを考古学的に裏付ける。陶磁器の産地は九州の肥前がほとんどであるが、東海の瀬戸美濃、在地の布志名や石見を含んでいる。

新旧2段階にわたる石垣は、前面が揃うようきれいに積まれており、一時的には露出した状態であった可能性がある。その場合、敷地は一樣に平坦であったわけではなく、石垣によって区画された段が並んだ景観も想定できる。敷地の拡張は、石垣の前に石垣を構築し、その間に盛土をすることで進められていった。第1・2トレンチの旧石垣と新石垣間の埋め立ては、水流を使った土砂の流し込みがみられ、鉄穴流し技術の応用があったとも考えられる<sup>(3)</sup>。

一方、新旧石垣には、石積みの一部に椀形鍛冶滓が転用される。第1トレンチ東壁では、新石垣の上にスラグ・焼土・炭片を含んだ土層がみられるほか、第2トレンチ新石垣の前面下方には椀形鍛冶滓が多量に廃棄され、新石垣の前もスラグを含んだ砂で層状に埋まる。欠損のない椀形鍛冶滓(第14図25)は長さ66cm・幅33cmであり、大鍛冶場の下げ場または本場と一致する大きさである<sup>(4)</sup>。スラグ類は敷地の造成用として他の場所から持ち込まれたものである可能性も想定されるが、第1・2トレンチ東壁で見られる薄いスラグ層や炭・焼土が層状になっているのは、付近で操業が行われていたことを示すものであろう。

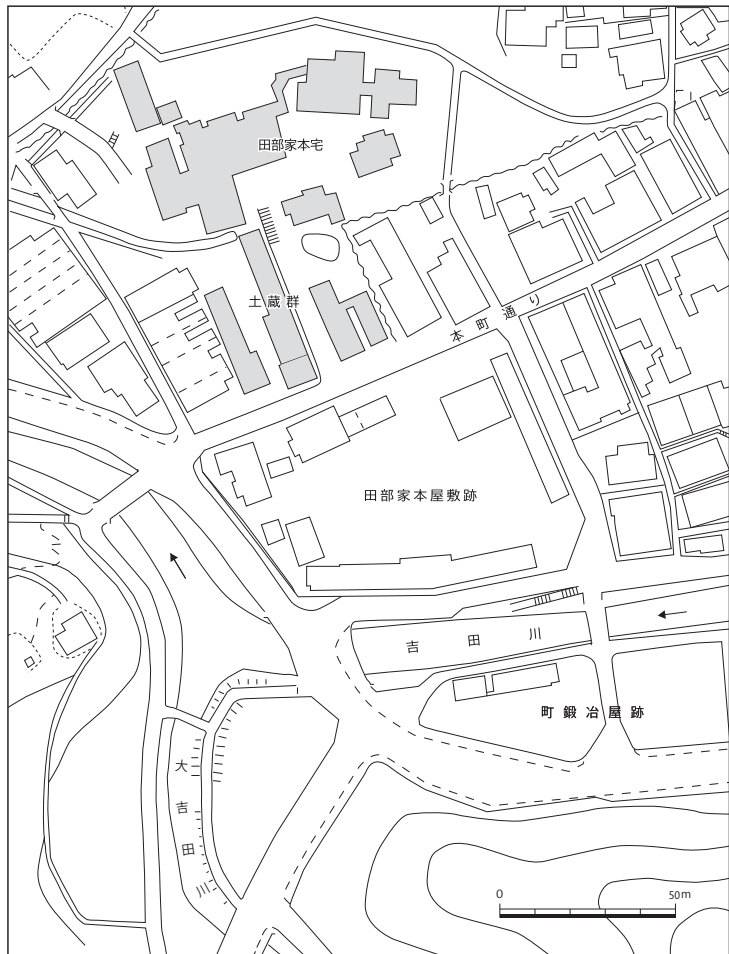
大鍛冶は、石垣に転用された椀形鍛冶滓からその構築以前から行われ、石垣前の堆積状況などから構築後も続いたことが考えられる。前述のように、新石垣の南側で出土した肥前花鳥文芙蓉手大皿は1650～70年代まで遡るものである。第1トレンチ東壁で採取した炭化物と第2トレンチ出土鉄滓より抽出した炭化物の年代測定は、暦年較正の結果にばらつきが大きく参考値ではあるが、25層は1 $\sigma$ 暦年代範囲1636-1657calAD(58.5%)・2 $\sigma$ 1632-1663calAD(64.0%)、28層は1 $\sigma$ 暦年代範囲1651-1666calAD(35.9%)・2 $\sigma$ 1642-1672calAD(47.5%)と17世紀中葉の年代が高確率となっており、陶磁器の年代観に近い。したがって、大鍛冶は17世紀後半には行われていた可能性が考えられる。ただし、「田部家本屋敷絵図面」には大鍛冶場の記載がないことから、それ以前に操業を終えていたこともわかる。

本屋敷と吉田川を挟んで対面する位置には、田部家がたたら経営の拠点とした町鍛冶屋<sup>(5)</sup>があった(第19図)。町鍛冶屋の創業をめぐっては、文化3年(1806)の田部家文書「鑪鍛冶屋御免之年限書出シ目録」に記載がある。これによれば、吉田町は貞享2年(1685)から鍛冶屋を共同で3年間にわたり無運上で操業したが、経営がうまくいかず、田部安右衛門に操業を依頼したと伝えられる。元禄4年(1691)には吉田町目代治右衛門より「吉田町鍛冶屋願書」が提出される。安右衛門は、元禄2年(1689)に宍道屋与右衛門から土地を購入しており、証文に「川向私こや跡に鍛冶屋こや御作り成さるべき由」とあることから、町鍛冶屋の創業に関わる史料とされる。また、元禄5年(1692)には大島治右衛門より「吉田まちかぢやとこ向ヶ原」を購入した記事があり、町鍛冶屋の本格稼働が指摘されているほか、元禄16年(1703)にも吉田村庄屋助八から「向川原残り無く」「但しかぢや床并に小屋敷共」を購入する(中山2016)。

田部家が経営した町鍛冶屋は、吉田町が共同で稼業していた鍛冶屋を引き継いだものであることがわかるが、同家はそれ以前から大鍛冶場を経営していたようである。寛文13年(1673)の田部家文

書「永代売渡申鑪山鍛冶屋山之事」では「鑪道具・鍛冶屋道具共ニ」入手しており（佐竹 2012）、前述した元禄 4 年の「吉田町鍛冶屋願書」にも「安右衛門ヨリ鍛冶屋入用大工手子」を出す旨が書かれている（中山 2016）。したがって、田部家が 17 世紀代後半には大鍛冶場を操業していたことは明らかであろう。

このようにみると、本屋敷跡において 17 世紀後半に行われていた大鍛冶操業は、吉田町が共同で稼業した鍛冶屋か、田部家が操業した鍛冶屋の可能性が考えられる。前者の場合、吉田町の鍛冶屋があった時点では調査地付近は田部家の屋敷地ではなかったことになり、後者の場合には本屋敷の敷地内で同家が大



第 19 図 田部家本屋敷と町鍛冶屋の位置

鍛冶操業を行っていたこととなる。元禄 2 年に田部家が鍛冶屋を建設するために土地を取得した「川向」であるが、元禄 5 年と 16 年に追加取得した際には「かぢやとこ（床）」も含まれていることから田部家の購入以前から大鍛冶場があったようだ。元禄 5 年の「吉田まちかぢやとこ」は、元禄 4 年に「吉田町鍛冶屋願書」を出した吉田町目代治右工門とみられる大島治右工門より購入されたものである。「吉田まちかぢやとこ」が吉田町が共同で稼業した鍛冶屋を指すとすれば、吉田川を挟んで本屋敷内にあった田部家の大鍛冶場が、元禄 2 年以降、対岸に移され町鍛冶屋として操業するようになったとも考えられる。

今回の発掘調査は、田部家本屋敷跡の全体からすれば、極めて限られた範囲を対象としたにすぎない。残念ながら、慶応元年に焼失した屋敷跡を敷地の中心部では確認することはできなかったが、田部家が屋敷地の購入を始めた 17 世紀半ばから敷地の造成が始まっていたことが明らかになった。また、大鍛冶場があったことも判明するなど、数々の成果を上げることができた。鉄師頭取田部家が本拠とした本屋敷跡は、たたら製鉄の歴史を考える上においても重要である。敷地内にあった大鍛冶場の位置や構造、焼失した屋敷跡の遺構が周辺部に残存するかどうかなど、なお残された明らかにすべき課題も多い。さらなる実態解明のためには、今後の発掘調査が期待される。

## 註

- (1) この火災で田部家は居家 1 軒・土蔵 2 軒・酒蔵 2 軒・納屋小屋 2 軒などを焼失した（相良 2012b）。
- (2) 明治 2 年（1869）の「圃米土蔵新建二付書上」（田部家文書「元治二年旧記」）による（鳥谷 2022）。
- (3) 規模は異なるが、新田開発に鉄穴流し技術を応用した流し込みによる造成が使われていることが奥出雲町大原新田などで報告されている（林 2013）。
- (4) 飯石郡角井村（現飯南町）戸井谷鍛冶屋は、田部家が経営した大鍛冶場で、発掘調査が行われている。本場とみられる 2 号炉には火窪の中に椀形鍛冶滓が原位置で残っており、その大きさは長さ 70cm・長さ 30cm である（目次編 2001）。
- (5) 町鍛冶屋があった地点は、明治 22 年の字切図によれば、「鍛冶屋原」と表記されている。

## 参考文献

- 相良英輔 2011 「近世前期の田部家とたたら経営」『山陰におけるたたら製鉄の比較研究』島根県古代文化センター
- 相良英輔 2012a 「(序) 田部家たたら製鉄史業の概要」『田部家のたたら研究と文書目録 [上]』雲南市教育委員会
- 相良英輔 2012b 「松江藩における近世中・後期たたら製鉄業の展開」『田部家のたたら研究と文書目録 [上]』雲南市教育委員会
- 佐竹 昭 2012 「田部家の鉄山集積過程と鉄山証文」『田部家のたたら研究と文書目録 [上]』雲南市教育委員会
- 鳥谷智文 2022 「田部家の邸宅と本町通り」『雲南のたたら文化』雲南市たたらプロジェクト会議
- 中山富広 2016 「近世出雲における大鉄師成立の再検討—飯石郡吉田村・田部家を事例として—」『中国四国歴史学地理学協会年報』第 12 号 中国四国歴史学地理学協会
- 林 正久 2013 「鉄穴流しと土地利用」『奥出雲町文化的景観調査報告書—奥出雲たたらと棚田の文化的景観』奥出雲町教育委員会
- 目次謙一編 2001 『戸井谷尻遺跡・長老畑遺跡』島根県教育委員会

